Kurume City Plaza

久留米シティプラザ ユースプログラム

新しい演劇鑑賞教室

2022年度 事業報告書

久留米シティプラザ

主催：久留米シティプラザ　助成：令和４年度 文化庁 文化芸術創造拠点形成事業 文化庁

目次

事業概要 …… 02

企画監修者より …… 03

各回の記録

1 イントロダクション、演劇ワークショップ …… 05

2 『妖精の問題 デラックス』関連事業 プレレクチャー
「劇場で考える ～ジェンダー・多様性～」 …… 07

3 市原佐都子 /Q
『妖精の問題 デラックス』鑑賞、市原佐都子との対話 …… 08

4 『Pamilya（パミリヤ）』関連事業 プレレクチャー
「劇場で考える ～多文化共生～」 …… 09

5 村川拓也
『Pamilya（パミリヤ）』鑑賞、村川拓也との対話 …… 11

6 振り返り …… 12

参加者レポート、アンケート

「劇場で考える ～ジェンダー・多様性～」および感想シェア会、
『妖精の問題 デラックス』鑑賞、市原佐都子との対話を経て、いま思うこと、感じること …… 13

「劇場で考える ～多文化共生～」および感想シェア会、
『Pamilya（パミリヤ）』鑑賞、村川拓也との対話を経て、いま思うこと、感じること …… 23

ユースプログラム参加者へのアンケート分析の結果 …… 33

寄稿

久留米大学文学部「異文化体験実習II」との連携（寄稿：神本秀爾） …… 37

九州大学大学院「スタジオプロジェクト」との連携（寄稿：長津結一郎） …… 39

関係者プロフィール …… 41

「新しい演劇鑑賞教室」とは

久留米シティプラザでは、2022年度、新たに「知る／みる／考える　私たちの劇場シリーズ」として、独自の視点で時代を捉え、表現方法をも模索し応答しようと試みる意欲的な2つの演劇作品『妖精の問題 デラックス』『Pamilya（パミリヤ）』を上演。それにあわせ、とくに次代を担う若者を対象に、作品鑑賞とアーティスト等との対話を組み合わせたユースプログラム「新しい演劇鑑賞教室」を始動しました。

演劇は、娯楽として非日常の体験をもたらすものである一方、他者や社会との関わり方を学ぶツールでもあります。本プログラムは、演劇やアーティストを身近に感じてもらうことや、作品を通じて社会に目を向けること、対話や思考により視野が広がり、気づきが増えていくことを目的にしています。

事業概要

日程	2022年6月5日（日）～12月25日（日）　<全6回>
会場	久留米シティプラザ　Cボックス、中会議室、小会議室、スタジオ
企画監修	長津 結一郎（九州大学大学院芸術工学研究院准教授）
応募条件	15～25歳程度
参加者総数	延べ 114人
主催	久留米シティプラザ（久留米市）

※本事業は久留米大学文学部国際文化学科 および九州大学大学院芸術工学府開設科目「スタジオプロジェクト」と連携し実施しました

スケジュール

6月5日（日）	**イントロダクション、演劇ワークショップ** 進行：多田淳之介、長津結一郎
6月11日（土）	『妖精の問題 デラックス』関連事業 プレレクチャー **「劇場で考える ～ジェンダー・多様性～」** ゲスト：石井勇、正路佐知子　　進行：長津結一郎
7月3日（日）	市原佐都子 /Q **『妖精の問題 デラックス』鑑賞、市原佐都子との対話** ゲスト：市原佐都子、木村覚、額田大志　　進行：長津結一郎
11月27日（日）	『Pamilya（パミリヤ）』関連事業 プレレクチャー **「劇場で考える ～多文化共生～」** ゲスト：田中優子、田中俊明、中山寧　　進行：長津結一郎
12月18日（日）	村川拓也 **『Pamilya（パミリヤ）』鑑賞、村川拓也との対話** ゲスト：村川拓也　　進行：長津結一郎
12月25日（日）	**振り返り** 進行：長津結一郎

総括

企画監修者より

長津 結一郎（九州大学大学院芸術工学研究院准教授）

この総括でははじめに、今回のプログラムが置かれている文化政策的な位置付けを確認しておきたい。

久留米シティプラザは久留米市による直営の文化施設である。老朽化した久留米市民会館に替わる文化施設としての機能、医療や企業の発展・交流を促進するためのコンベンション施設としての機能、そして、中心市街地活性化の役割を担う中核的施設としての機能を併せ持った施設として、「憩いと賑わいが調和する『文化』『活力』創造空間」を目指して2016年4月にオープンした。

久留米市は久留米市文化芸術振興基本計画（令和2年度～7年度）の計画の柱の一つに、「文化施設の特性を活かした文化芸術の創造と活動の推進」を掲げ、久留米シティプラザにおいては「市民に上質で多様な文化芸術を鑑賞する機会」等を推進していくことが明記されている。中でも市の具体的な取り組みとして、以下のように教育普及の活動が位置づけられている。

「文化芸術に触れるきっかけづくりとして行う館内での体験型事業等を通して教育普及の取り組みを進めます。特に、次代を担う子どもたちの想像力・感性を高めることを目的に、良質な鑑賞事業やワークショップ等、多様な事業に取り組みます。」

これまで久留米シティプラザではこの計画のもと、キッズプログラム等の子ども向けの事業が行われてきた。ただ、久留米市周辺には久留米大学をはじめとして多くの大学や高等教育機関が設置されているものの、若者世代に対するアプローチはこれまで十分に行われてこなかった。このユースプログラムはこのような背景から、高校生・大学生や社会人になったばかりの若年層を対象として、演劇に出会い、演劇とその背景にあるものを知ることにより、市内外の文化芸術活動に関心を持つ若者を育てることを目指し、「上質で多様な文化芸術を鑑賞する機会」をより多様な市民に届けるための足掛かりとなるプログラムとして位置付けることができる。

次に、参加者へのアンケートの結果を顧みながら次回以降に向けた課題を整理しておきたい。

まず、全般的な満足度は非常に高く、特に参加者にとって、対話の時間やプレレクチャー、さらにはアーティストによる表現を鑑賞することで、新たな気づきや発見、さらにはまた参加したいと思うきっかけがあるようなプログラムであったことがわかった。このことは、従来久留米シティプラザに来場していなかった層に対する鑑賞機会の拡大につながっているということが考えられるだろう。今後も継続的に若年層に向けたプログラムを行なっていくことで、より多様な層に久留米シティプラザの存在を知ってもらい、芸術文化を親しむ人が増えることが期待できる。

また特に今回注目すべきは『妖精の問題 デラックス』についてである。本作品はその表現の先鋭性に対して芸術界からの評価が高く、ジェンダー・セクシュアリティに関する鋭い投げかけがなされた前衛性の高い作品であった。しかしユースプログラム参加者の間では、演劇やアーティストへの興味関心をさらに高めるような時間になっていたことがアンケートからはわかった。時に難解に捉えられがちな現代演劇においても、それを鑑賞する機会をつくることは重要なのだと改めて感じた。

その一方で同作品については、大学の授業としての枠組みで参画した参加者も含めたアンケート集計によれば、必ずしも満足度は高くなかった点は留意すべきだ。この要因はいくつかあるだろうが、今後に向けた指針としては、表現を鑑賞するための「入り口」づくりをより丁寧にする必要があるように思われる。今後も大学等の教育機関と連携する際には、時には大学の側の授業の位置付けを工夫したり、鑑賞の手がかりとなることを意識したりすることで、多様な声を聴きながらプレレクチャー等の関連プログラムを設計していく必要があるだろう。

またアンケートで全般的に、新たな人と人とのつながりを得られるプログラムになっていたかという点や、久留米シティプラザへの親しみを感じていたかという点には発展の余地を残した。このうち、新たな人と人とのつながりづくりについては、ユースプログラムのプログラムデザインが関係しているだろう。6月から12月までの長期プログラムとなったことや、前半と後半で連携する大学が変わったことにより、参加者全体での一体感を創出するようなプログラムにはなっていなかった。今後は参加者同士の交流も意識した日程組みやプログラム構成が求められる。

また久留米シティプラザへの親しみや地域課題との接続の点については、ファシリテーションのデザインが関係している。プレレクチャーや公演終了後の「対話の時間」では様々なトピックが議論され、参加者からの発言機会も多く確保されていたが、久留米というまちのことと接続させて公演を位置付けるような思考が育つようなファシリテーションにはなっていなかったことが今回の反応につながっている。参加者がそれぞれ、演劇鑑賞と対話で得られた「知」を、日常生活に持ち帰るための橋渡しを、今後はより丁寧に行なっていく必要があると考えられた。

若者たちがユースプログラムの参加を通じて、久留米シティプラザが置かれているこのまちのことを考えること。久留米市文化芸術振興基本計画には、「久留米市の次代を担う子どもたちの想像力・感性」を育むことが目指されていることを踏まえると、芸術文化を楽しむという「感性」だけでなく、地域をこれまでとは異なる視点で捉えるための「感性」も含まれているのかもしれない。次年度もこのようなことを念頭におきながら、プログラムを進行していきたい。

2022年 6月 5日（日）13:00-16:00

1 イントロダクション、演劇ワークショップ

会場：久留米シティプラザ　C ボックス
進行：多田淳之介（演出家・東京デスロック主宰）、長津結一郎（九州大学大学院芸術工学研究院准教授）

13:00　参加者集合、イントロダクション

円形に並べた椅子に参加者が自由に着席。担当スタッフと長津さんが本プログラムの趣旨を説明した。

13:10　自己紹介

多田さんへ進行を移し、これまでの自身の活動を紹介。画像や動画を使用しながら、劇団での活動や、芸術監督を務めた公立文化施設の普及活動などを説明。演劇、表現のすそ野の広さを予感させる内容だった。その後、参加者の自己紹介。緊張した面持ちの中「氏名、参加動機、最近食べておいしかったもの」を話した。

13:45　シアターゲーム

〈名前を呼びあおう〉

自分の名前を呼ばれたら、誰かの名前を呼ぶ。次に指をさしながら呼ぶ、ペースを上げてみるなど、徐々にお題が増えていく。ゲーム感覚で行い、場がだんだん和む。

〈同じ人を見つける〉

“血液型”にはじまり“好きな色”“好きなおにぎりの具”そして“久留米と言えば”まで、自分と同じ人を探して集まる。参加者は声やジェスチャーを駆使していた。「キャッチボールのように、発信するだけでなく、受信することもポイント」と多田さん。

〈同じ数字の人を探そう〉

全員を2グループに分けて、数字の1から6を割り当てる。テーマは趣味。1番は「おとなしい」趣味、6番は「活発」な趣味として、数字に見合うと自分が思う趣味をそれぞれ考案。考案した趣味の話を手掛かりに、相手のグループの自分と同じ数字の人を探してみる。参加者たちは囲碁やボルダリングなどさまざまな趣味を考案し、与えられた数字を意識しながら質問しあっている様子。架空の趣味について、みな積極的にそして楽しそうに話していた。多田さんから「演技は人に何か伝えるためのもの。そういう意味においては、人は誰しも演じながら生きているということだと思う」という言葉があった。

〈しりとりの再現〉

4グループに分かれて〝著名人の名前”をお題に1分間しりとりを行い、その内容を台本化する。しりとりした内容だけでなく、会話や間、身ぶりなども細かく思い起こしながら、グループで協力し書き出した。そして、その台本を使ってしりとりを再現。「演劇にすると私たちの生活や振る舞いを改めて見ることができるのが面白いところ」と多田さん。各グループでどのようなコミュニケーションが行われていたかが明確になった。
再現を数回繰り返すうちに精度が上がる。そこで立ち位置を変更したり動きを追加したりして、いわゆる演出が加えられた。すると、全員が一方向を向いたり離れた場所に移動したりしながらでも、互いに充分なコミュニケーションがとれているので、しりとりが再現できていた。

さまざまなゲームを通して、演劇がコミュニケーションや想像を促すということを体感した3時間。自然とお互いへの興味が高まり、連絡先を交換しあう様子も見られた。

16:00　アンケート記入

（アンケートより）「“演じる”“再構成する”“再現する”という行為を通して、コミュニケーションのあり方に直接触れられたと思う。」「ワークショップを通してかなり気持ちよくコミュニケーションが行えた。」「演じることと日常は近いように感じた」

多田さん

2022年 6月11日（土） レクチャー 14:00-15:30 感想シェア 15:45-16:20

『妖精の問題 デラックス』関連事業 プレレクチャー

2 「劇場で考える ～ジェンダー・多様性～」

会場：久留米シティプラザ　中会議室
ゲスト：石井勇（MINOU BOOKS 店主）、正路佐知子（福岡市美術館 学芸員）
進行：長津結一郎（九州大学大学院芸術工学研究院准教授）

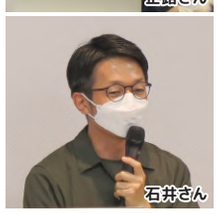
14:00　参加者集合、趣旨説明

一般参加者とともに着席。
担当スタッフと長津さんが本レクチャーの趣旨を説明した。

14:10　実践事例紹介

〈正路さんのレクチャー〉

表現の自由が保障されていると思われがちな美術館においても、所蔵作家の男女比などジェンダーバランスの不均衡が如実にあることを指摘。また近年フェミニズムの視点でも先駆的存在として注目を集めている福岡の美術家・田部光子の作品も紹介。



〈石井さんのレクチャー〉

昔ながらの家制度・家父長制が色濃く残る地域の書店主として、社会の中に新しい価値観があることを知らなかったり、その狭間で苦しんでいたりする人たちを意識して、ジェンダーや多様性に関する選書をしている状況やおすすめの書籍を紹介。

15:10　ディスカッション

参加者が提出した「質問」「意見・感想」をもとに、長津さんからゲスト2人へ問いかけがなされた。

15:30　プレレクチャー終了、一般参加者退出

15:45　感想シェア

「今日の話を聞いて心にとめておきたい言葉や、今後の生活や活動で活かしていきたい考え方」を無記名で回答。集まった多様な意見をスライドに表示し、長津さんが読み上げてシェアした。
その後、各自感想を持ち寄りグループに分かれて対話。「美術館の展示作品に占める女性作家の比率の低さは思った以上」「提示されたものを正しいと思ってしまいがちなので、その他にも良いものがあることや、なぜ表に出てないのかという理由を探すことに価値があるかも」「石井さんの話を聞き、男性にも生きづらさがあると分かった。フェミニズムが広まることで、男性の生きづらさも同時に広まるといいなと感じた」「当たり前は“誰かが決めている”というその“誰か”の存在と向き合っていきたい。そして、変えていくために声も上げていきたい」など、ジェンダーをめぐって多様な立場や背景があることを知り、自分自身を見つめなおす時間になったようだった。

〈ゲストからひと言〉

石井さんから「たくさんの本を読んだが最終的によく分からなくなった。その不安定さで今の世の中はできている。今日の話も分からなくていい。分からないというところから始めてほしい」、正路さんから「みなさんそれぞれの立場・いる場所でできることを模索してやることで、色々な動きが生まれたり、繋がっていくだろう」との言葉があった。

16:20　アンケート記入

2022年 7月 3日（日） 鑑賞 13:30-15:40 対話 16:00-17:00

3 市原佐都子 /Q『妖精の問題 デラックス』鑑賞、市原佐都子との対話

会場：久留米シティプラザ　C ボックス（公演）、中会議室（対話）
ゲスト：市原佐都子（作・演出）、木村覚（ドラマトゥルク）、額田大志（音楽）
進行：長津結一郎（九州大学大学院芸術工学研究院准教授）

13:30 鑑賞

〈作品について〉才能あふれる新世代の劇作家・演出家のひとり、市原佐都子。この作品は2016年の相模原障害者施設殺傷事件を受けて、作者自身が内面や生きづらさを見つめて創作したもので、できるだけ偽善的ではない方法であらゆる生／性を肯定するということを試みている。タイトルの「妖精」は「見えないもの」の隠喩。現代の日本社会で「見えないことにされているもの／しているもの」――誰しもが直面してきたであろう差別や偏見を、バンド演奏や漫才、歌、ダンスなどで3部構成にして、ユーモラスかつ斬新な演出で描いた。

16:00 参加者集合、趣旨説明、テーマ・問いの共有

参加者から「しゃべってみたいテーマ・問い」を募り、スライドに表示し共有。劇中の特定の台詞や場面、男性としての視点、鑑賞後に自分の感情を表現することの難しさなど、多様なテーマが挙がった。

16:25 グループでの対話

「平均を求めすぎると社会はどうなっていくのか」「観客の反応が演劇の進行に関係すること」「なぜバクが登場したのか」「不自然撲滅党のこと」「そもそも何を伝えたかったのか」の5つのテーマに絞り、各自が希望するテーマに分かれて感想をグループでシェアした。作品から受けた衝撃、疑問、感想を言語化する戸惑いなどが話し合われ、それぞれの向き合い方で鑑賞体験を深める時間となった。

16:40 感想シェア、ゲストとの対話

市原さん

木村さん

ゲストも加わって全員で車座となり、グループで話したことを共有した。
「観客の反応が演劇の進行に関係すること」について話したグループからは、「自分の感覚を公表することは恥ずかしい。拍手したり笑ったりすると、隣の人に『そこで笑う人なんだ』などと思われることがちょっと嫌だった」「演出家が観客にどう反応してほしかったのかがよくわからなかった」等の意見が出た。作・演出の市原さんからは「発言してくださったようなことがみなさんの中に起こっているということがすごく嬉しい。反応に正解はない。舞台から投げかけられたことに揺さぶられ、『自分はこう思う』というようなことがそれぞれに起きて、それぞれが反応すればいいと思っている」、ドラマトゥルクの木村さんからは「『どうしてほしいのか』に応答するようなコミュニケーションに、みなさんの世代はすごく敏感で、そういう社会を生きているのかもしれない。もっと主体的でいいんだと思う。いろんなことを感じ、考えたということ、それら全部ひっくるめて体験。それが鑑賞したということの中身になってくるんじゃないかな」との応答があった。
また、音楽が生演奏だったことについての質問に、「バンドがいることで、（演技が行われている）正面だけでなくバンドの方を見る時間もでき、いろんな視点ができる。また、今回は歌唱力で魅せることよりも歌詞をしっかり届けることが大事で、歌い手のちょっとした機微のようなものを捉えて、強弱やテンポを調整しやすいと考えて生演奏にした」と音楽の額田さんが返答した。

額田さん

〈ゲストからひと言〉

木村さんから「今日体験したことをすぐに理解し説明することは無理だと思う。じっくり味わってほしい。みなさんの体験の中にたぶん答えがある。あるいは答えを探し続けることがすごく大事。時々思い出してみてください」、市原さんから「私が答えを持っているわけではなく、私は問いを投げかけて、みなさんの中にフツフツとしたものが起こっているなら、それがすごくいいことだと思っている。そういうものを持ったということが、豊かな時間だったんじゃないかと思っている」との言葉があった。

17:00 アンケート記入

2022年 11月27日（日） レクチャー 14:00-15:30 感想シェア 15:45-16:20

『Pamilya（パミリヤ）』関連事業 プレレクチャー

4 「劇場で考える ～多文化共生～」

会場：久留米シティプラザ　中会議室

ゲスト：田中優子（外国人介護士育成・就労支援）、田中俊明（リアルテクノロジー株式会社 代表取締役）
中山寧（生活相談員）

進行：長津結一郎（九州大学大学院芸術工学研究院准教授）

14:00　参加者集合、趣旨説明

担当スタッフが本レクチャーの趣旨を説明した後、長津さんが『Pamilya』の概要や文化政策における在留外国人の位置付けを説明。国際交流イベントの多くが3F（フード、ファッション、フェスティバル）に留まっていることと、その課題も伝えた。

14:15　実践事例紹介

〈田中優子さんのレクチャー〉

高度経済成長とともに地方で高齢者世帯が増え、家庭内で行われてきた介護を専門的に行う人材が必要になり、1987年に介護福祉士が国家資格として位置づけられた。1997年には年少人口（0～14歳）と老年人口（65歳～）が逆転し少子高齢化問題が深刻化。国は介護人材の不足を補うために外国人を受け入れ始め、今では外国人が日本の介護を支えているという経緯を説明した。また、資格や制度の違い、介護士育成の現状など、外国人介護士を取り巻く状況を紹介。異国の地で学び、働き、生活している彼らへの尊敬と感謝も述べた。

〈田中俊明さんのレクチャー〉

ビジネスマンとしてアジア各国へ渡航し体感した文化の違い、フィリピン出身者と結婚して知った家族観や生活習慣の違いなどを紹介。俊明さんによると、フィリピンでは家族のために働ける人が働くという考え方があるらしい。また、フィリピンは世界最大の労働輸出国として知られていて、GDPの10%を出稼ぎ労働者による海外送金が占めていることなどを紹介した。

15:00　ディスカッション

会場には、『Pamilya』初演時（2020年）に実施されたリサーチで出会った中山さんを招いており、体験談を伺った。
約30年前に中国から留学生として来日して帰化し、長く介護職に従事する中山さん。長津さんはリサーチで中山さんに話を伺った際の印象を、「『日本人です』と言えば日本人に見える。隠せてしまうしんどさは、胸に迫るものがあった」と鮮明に記憶しているそう。
中山さんは、「国籍は日本人になったが日本人ではない。今も中国人だと思っている」「職場では自分を外国人と思って働いてはいない。ただ、話すと違和感があるので、会社の人や友人には外国人であることを伝えている。隠せないし、隠したくはない。それが自分の特徴。でも、利用者には隠している。戦争体験者も多く色々な感情を持っている場合もあるので、不安にさせないように」と語った。

〈ゲストからひと言〉

中山さんから「このような会で、在住外国人のことを考えてもらいありがたい」、優子さんから「中山さんが以前〝『どこの国の人ですか?』って聞かれたら『地球人です』と答える〟と言われたことが印象に残っている。多文化共生も『みんな地球人』だと考えれば理解できるのかな」、俊明さんから「海外から来られた方に対しても日本人同士でも、相手のことを思いやり、その思いをきちんと伝えることが大事」との言葉があった。

15:35　プレレクチャー終了、一般参加者退出

15:45　感想シェア

感想・質問を無記名で回答。「自分がいかに先入観や偏見を持って生きてきたか気づく機会となった。出身国で区別することが多文化共生の壁になると知ることができた」「中山さんの話を聞いて、自分の立場を（相手のことを気遣って）言わないことは、自分のアイデンティティを無いことにすることと同じなのだと気づかされハッとした」「生活環境の違い、文化の違い、心持ちの違いは明らかにあるから、ある程度想像してコミュニケーションをとる必要はある。他者のバックグラウンドは自分の想像を超えるものであるということを自覚しなければならないと感じた」など、集まった感想をシェアした。

「『Pamilya』に関わってみて感じたこと」の質問には優子さんが「最初に話を聞いた時は無謀だと思ったが、ジェッサさんは国家試験の勉強も、演劇の練習もしっかりやり遂げ、本当に尊敬しかなかった。私たちがもっと勉強して、外国から来た人たちを多方面で伸ばしてあげないといけないと思った」と回答。
「フィリピンの家族観ならではのポジティブな部分を聞きたい」という質問には俊明さんが「妻の実家で家族愛の強さを実感した。何でも協力し支えあって生活している。そして非常に自由に、おおらかに生きている」と回答した。

16:20　アンケート記入

2022年 12月 18日（日） 鑑賞 15:00-16:10 対話 16:45-17:45

5 村川拓也 『Pamilya（パミリヤ）』鑑賞、村川拓也との対話

会場：久留米シティプラザ　C ボックス（公演）、小会議室（対話）
ゲスト：村川拓也（演出）
進行：長津結一郎（ドラマトゥルク／九州大学大学院芸術工学研究院准教授）

15:00 鑑賞

〈作品について〉取材を重ね、現実の出来事をもとにドキュメンタリー的手法で舞台作品を制作する演出家、村川拓也。2019年、福岡の介護福祉施設を対象にリサーチを行い、出会ったフィリピン出身の介護士が出演する本作を制作した（2020年初演）。「Pamilya」はタガログ語で「家族」のこと。介護の現場を舞台に、そこに現れるもうひとつの「家族」の物語は、現代社会を生きる誰もが無関係ではいられない「支える／支えられる」こと、その本質を浮かび上がらせた。

16:45 参加者集合、趣旨説明、感想シェア

参加者から感想を募り、長津さんがホワイトボードに記述しながら共有。劇中の特定の台詞や場面から受けた感想や疑問、処理しきれなかった感情やすっきりしない感情もシェアされた。
中でも、「なぜ介護される人を観客から募ったのか？ 役者を用意すれば良かったのでは？」という疑問には、様々な意見が挙がった。俳優をしている参加者からの「演劇は客席と舞台を切り離すことが一般的と思っていたが、その境界をなくす役割があったのではないか。また、観客から募ることにより、他の観客は舞台の上のエトウさん役（介護される人）に自分を投影する。客席と舞台の中継役のように感じた」という意見をはじめ、「誰しもが介護される立場になりうることを伝えたかったのでは」「役者ではない人がエトウさんを演じることにより、演技に曖昧さや戸惑いみえて、リアルさを感じた」「役者は『そういう人の動き』が出来てしまうと思うが、役者ではない人がやると、動きは受動的になる。実際、介護現場で介護される人は、その場で言われて動く。つまり、現実の介護現場の状況に近かったのでは」と、一つの疑問からいくつもの見方・意見がうまれ出て、共有されていった。

17:25 ゲストとの対話

村川さん

演出の村川さんも加わり、感想や疑問をシェア。直接聞きたいこととして「なぜマイクを使っていたのか？」という質問があり、村川さんは「自分は介護する人の動きが美しいと思っているので、そこをしっかり見せたかった。『喋る』『マイクを置く』『行動する』というように、言葉と動きを切り離すことで、言葉がよく聞こえ、動きもよく見える。だからマイクを使っている」と回答した。
さらに、「介護する人の動きに美しさを見出したきっかけは？」という質問が挙がり、『Pamilya』の原型となった作品『ツァイトゲーバー』（2011年）のことが語られた。「大学でドキュメンタリー映画の勉強をし、卒業後はある劇団に演出助手で入り、その影響で少し頭でっかちな演劇作品を作り葛藤していた。うまくいかない日々の中でふと思い出したのは、学生時代から一緒に演劇を作ってきた友人の稽古場での様子だった。障害のある方の在宅介助のアルバイトをしている彼は、役者ではない。それでも彼の魅力を引き出したいと思い、普段の介助の仕事を再現してもらったところ、それが衝撃的だった。言葉も動きも自発的に出てくるし、動きに無駄がなく美しい。台本もないし何の指示もしていないのに、そこに演劇があるような気がした。演劇をやめようかと思った時にその日のことを思い出し、素舞台の上で彼に在宅介助の場面を再現してもらう作品『ツァイトゲーバー』を作った。『Pamilya』と同様に、介助される役は観客から募り上演。自分でも手応えがあったし、人からも良かったと言われ、ようやく自分の思う作品ができたと感じた」と、自身の経験を交えながら返答した。

17:00 アンケート記入

2022年 12月25日（日） 14:00-17:00

6 振り返り

会場：久留米シティプラザ　スタジオ
進行：長津結一郎（九州大学大学院芸術工学研究院准教授）

14:00 参加者集合、趣旨説明、アイスブレイク

円形に並べた椅子に参加者が着席。長津さんがこの日の趣旨を説明した後、シティプラザスタッフも交えてアイスブレイク。「最近あったこと」や「今日の調子」などを話し、和やかなムードからスタートした。

14:20 各自での振り返り

各自でこれまでの5回のプログラムを振り返り、「印象に残っていること」や「その時感じたこと・考えたこと」などを紙に書き出し、共有の準備をした。

14:45 振り返ったことを共有

『Pamilya（パミリヤ）』について

この日は公演1週間後だったので、「モヤモヤした感情がまだ残っている」「舞台と客席の境界についてずっと考えていた」「役者を使わずドキュメンタリー風にみせることで、生々しく見えた」「所作を観る作品だった。終演後の対話の時間があったから、動きの美しさに気づくことができた」と、鑑賞体験が鮮明に残り、思考が続いている様子が見受けられた。
「考えすぎて演劇に集中できなかった」「演劇を楽しむのか、社会問題を考えるために演劇を観るのか。両方やろうとして自分の中でうまくいかなかった」「学校の授業だったら正解を求められ、点数を付けられるが、演劇鑑賞に答えは求められない。感想をそのまま持ち続けられるのはすごく良いことだ」との意見も挙がり、長津さんが「『こう観てほしい』というのは暴力的で、作り手側の傲慢だろう。いろんな見方、解釈があっていい」と伝えた。

『妖精の問題 デラックス』について

「性的表現について、聞いてはいけないものを聞いた感じだった。不思議な感覚だったが、なぜ問題なのかという疑問も湧いた。配慮は本当に必要なのだろうか？」「対話の時間に『女性の権利を主張しすぎて逆差別もある』という意見があり印象に残った。女性が優遇されることもたくさんあるのに、自分が嫌なことにだけ刺激されて反応する風潮があるようだ。社会問題を取り上げるなら、自分が向かいたい方向以外への配慮も必要」など、作品の中で発せられたセリフやその背景が深く印象に残り、日常でも気づきやモヤモヤが続いている様子に、長津さんが「タブーとなっている言葉や表現を公言することで境界をなくす。その練習の場として演劇作品があった。『こういうことを言っていいのかな？』と思うきっかけや、『なぜこういう見え方をするのか？』と、立ち止まって考えるきっかけになっていたのでは」と応答した。
さらに、「フェミニズムの思想そのものに危険性はなくても、言葉の使い方次第でいかようにでもなってしまう」「性差別は人種差別に似ている。お互いが理解し合えば、踏み込める範囲も増えるはず」「大きい差別を解決しても、新たな問題が出てくるのでは？」といった意見も交わされた。長津さんは、「『だから問題を解消する意味がない』のではないと思いたい。今のこの瞬間を、少しでも良くして生きていきたいと思う人もいるのだから」との言葉を添えた。

ユースプログラムの未来について

「演劇と対話セットでようやく噛み砕けた気がする。もっとたくさんの人の意見を聞きたかった」「鑑賞後にももう少し対話したかった」「出演者と鑑賞者の境がない演劇を観たい」「演劇に対するハードルは高い。ハードルを下げる努力は必要」「センシティブなことに興味のない人も引き込める工夫を」などの意見が挙がった。

17:00 アンケート記入

参加者レポート

「劇場で考える〜ジェンダー・多様性〜」および感想シェア会、『妖精の問題 デラックス』鑑賞、市原佐都子との対話を経て、いま思うこと、感じること（順不同）

私が、この作品を観てまず感じたのは、何とも言い難い居心地の悪さだった。

そこには、私の知る世界とは違う何かが権威を持って存在していた。それを観ている私は、「こんな世界は絶対にあってほしくない」と思いながら、一方でこんな世界になり得る片鱗をどこかで見つけた気がしていた。私が生きてきた中で、身をもって感じてきた差別や排除がオブラートに包まれずに放出されたらきっとこんな風になるのだろうと感じていた。

その意味で、これは非常に挑戦的な作品であるし、この作品を鑑賞できたことで、自分や他者の中に現れる矛盾と向き合うことができたからだ。この作品を観て一週間、今までの経験を振り返りながら、自らで納得できるような答えを見つけてみた。この作品で伝えたかったことは、「人間は、信じたことを疑わず、やってしまう」ということだと考える。

この作品は、3部構成となっているが全ての部において「信条」というものが基盤になっていた。第1部では、「自分で食べることができない人は殺される」世界が実現しそうな世界、第2部でゴキブリを殺すために作られたバルサンを焚いてしまったことで妊娠中の胎児に「異常」が表れてしまった母親、第3部は、ある信条をもとに集まったコミュニティのこと。

それぞれ異なる信条をテーマにしていたが、根底にあるのは、「人間の愚かさ」であったと感じ取った。人間は一度信じたことはそれがどんなに間違っていることであっても、やってしまうという当たり前の、しかしとても恐ろしい現実を映し出したのが、この『妖精の問題』という作品であるのではないかと考えた。ただ、演出をされた市原さんとの対話の時間を考えると、その答えは人それぞれであり、その時々の経験によって変化していいのだと考え方が変化した。「分からないこと」を持ちながら、考えながら自分自身と向き合うことができるのが演劇の魅力で、私たちは、すぐに答えを出す練習ばかりをしていて、それに慣れきってしまっているが、「すぐに答えを出さずに考え悩む」ことが今私たちに求められていると考える。その答えは、人それぞれであって良いのだと思える演劇体験だった。

だからこそ、演劇によってしか映し出すことのできないものによって私たちの心は魅了されていくのだと感じた。今、日本では今まで例を見なかった事件が起こったことで、世間がざわついている。私は、最近特に「罪だが、罪と呼んでいいのかわからない」事件が多くなってきているように思う。事件の背景が一見したところすぐにわからないようなものである。そのような事件は、「見えないことにされていたもの」が事件の負のエネルギーによって一気に明らかになってくる。「見えないことにされていたもの」は人々の感情や都合によって覆い隠され続けていたものだ。そのようなものの近くには絶対に人知れず苦しんでいる人がいる。それを負のエネルギーに頼らずとも、私たちに伝え続けてくれるのが、「演劇」という非日常なのだと改めて感じた。

I.Y

かなり衝撃的な内容で、違和感に何度もさらされましたが、その度に自分の中にある普段気が付かない偏見を発見することができました。過激とも言える台詞が飛び交う作品であるにも関わらず、拒否感なく貪欲に次の言葉を期待できたのは、あのポップでフィクション性のある演出方法のためでしょう。見たくないものを見ないまま終わらせない戦略が鮮やかでした。

演出によって抽象化されてはいるものの、かすかに感じる無視できない拒否反応と嫌悪感そのものを見つめ、そういった反応が正しいのか、なぜそう反応してしまうのか、そのような反応が起こる社会構造とは、と自然に考えることができました。私が「自然」という言葉を使ったのは、安易な同情や感動なしで自分の観念を問い直せたからです。「可哀想だから」「一生懸命だから」大切に（保護）しなければならない、というような、同情や感動ゆえの多様性理解は、ある種の差別であると感じることがあります。第一章「ブス」で出てきた「可哀想がチャームポイントにならないかな」などの台詞からも、そのような見下す同情の視線にさらされる弱者の姿を想起させられました。

中でも私が衝撃を受けたのは第三章「マングルト」の話です。初めは、第一章で登場した不自然撲滅党の屁当弁に対して、反対勢力の行き過ぎた自然主義をも風刺する目的かと考えました。第二章でゴキブリを殺そうとする夫婦とゴキブリが重なり、最終的に異形のものが優勢とされ、対立する勢力のどちらが正しい（優勢）かわからなくなるという構造が確立していたからです。しかし、最終的に風刺というよりは、様々な生き物を肯定する良い宗派のように描かれていて、最後までどう捉えていいのかわかりませんでした。後から考えてみると、「ブス」も「女性器」は普通の女性と変わらないから子どもを産んでいい、と「ゴキブリ」もバルサンを焚かれても生き延びる異形の方が優勢かもしれない、と肯定されています。そのため「マングルト」で出てきたカルト宗教が肯定されるのは決して例外ではなかったと思いました。ただ、その内容が作品全体のテーマを包括しており、最もねらいとしている「生きているそれだけで素晴らしい、みんな平等で必要である」ということを含んでいるために混乱してしまいました。この混乱をも予想して作られたのかはわかりませんが、完全なる正義の勢力を出さないということを敢えてしているのだと感じました。

最後、幽霊のようにして出てきた「マングルト」開発者は、社会を俯瞰的な視点で語っていて、神のようにも見えました。それは理解しづらいがために崇められる弱者の姿を表現しているのではないかとも思いました。

通常の世界では芸人（女子高生漫才）として、弱者（貧困層・障がい者）として、あるいは神（カルト宗教創設者）としてオブラートに包まれた人々の姿を本物の姿で可視化し、存在を、生を鮮やかに肯定する『妖精の問題』は素晴らしかったです。

（中略）

この作品を見て、やっぱりこういうことは演劇にしかできないと感動しました。一緒の空間で観ている人たちが、同じ顔ではなく異なる表情をしていて、それでいて同じ問題に向き合わざるを得ない、そんな社会的・政治的要素を持った芸術がどこにあるだろうと思いました。もっと開いた形で他者と向き合える演劇鑑賞がしたいと思いました。

O.S

参加者レポート

「劇場で考える～ジェンダー・多様性～」および感想シェア会、『妖精の問題 デラックス』鑑賞、市原佐都子との対話を経て、いま思うこと、感じること（順不同）

私は高校で演劇部だったので、どのような劇が見られるのか、また私はジェンダーの問題にも興味があったため参加した。

最初にあった「プレレクチャーおよび感想シェア会」では、普段美術作品に対してジェンダーの問題を気にしたことはなかったが、そのような身近なところにも男女の問題は隠れているのだと分かった。モデルから、画家まで小さなこと1つ1つが様々な問題に関わってくるのだなと思った。

初めて他学年との交流を体験して、人によって考えていることは違うため、私にとってとてもいい刺激になった。また異性側の意見も聞けたので自分の考えだけに偏らずに、どう社会問題に向き合えばいいのか考えるきっかけになった。

そして公演の鑑賞を行った。私が今までに経験した演劇とはかけ離れているものだった。ストーリー性がなく、照明や音響、舞台配置、衣装にまで手が込んでいて、とても刺激的な内容だった。まず最初は１部の「ブス」という内容だった。平均重視の世の中になると、平均以下の人々は殺されてしまうという、残酷な世界になってしまうことが印象に残っている。最近「個性を大事に」ということを耳にするようになった。私はいきなり個性を出しすぎると周りから浮いてしまい、平均的になるとつまらない人間になってしまいがちだと思う。だからといって中立的立場に立てばいいのかという事も違うと思う。とても難しい題だった。しかし最初から最後まで下ネタばかりで漫才風にしているものの笑えなかった。むしろ1歩引いてしまった自分がいた。それは何もかもが馴染みのない世界だったからだと思う。

２部の「ゴキブリ」という内容は、見たくないものを見えない存在にしてくれている人がいるのだというセリフがずっと頭に残っていた。その存在の例がゴキブリだと思う。いきなりゴキブリを受け入れることは私だけに限らず、難しいことだと思う。人以外の生物に価値をつけてしまう部分が私にもあるのだと感じさせられた。

３部の「マングルト」という内容は、いきなり「マングルト」の存在を知っている前提で話が進んだ為、よくわからなかった。しかし、その作り方を知ってヨーグルトが食べにくくなった。どんな世界線なのかよくわからないが、ヨーグルトより「マングルト」の方が絶対的な存在であり、私たちの世界とは対照的だと思った。しかし、普段ヨーグルトに含まれている乳酸菌は腸の中にもともといて、その乳酸菌をヨーグルトで摂取している。排せつ物が通る腸を間接的に食べていることになる。それの女性器版なのだと考えると、どちらも似たようなものだなと考えることができた。だから気持ち悪いと考える必要がないということを伝えたかったのかもしれないと思った。

市原佐都子さんとの対話の時間では、不思議で疑問があふれ出るような、この演劇の演出家と話すことができた。観劇した人たちと話す機会でもあったので、疑問に思うことを出し合ったり、意見交換を行い、考えが整理できた。

普段は演出や演者たちのセリフに意味を求めてしまいがちだが、意味は無く、分からないものを楽しんでほしいという市原さんの意図がおもしろいなと思った。今までの演劇経験を覆す経験で、比にならないくらいに新しい体験だった。１つ１つのセリフが刺さり、情報量が追いつかなかった。しかし、情報を整理すると見る前と見た後で自分の心情の変化に気付くことができた。だから、身の回りの物に対して見る目が少し変わり、自己を見直す良い経験になったと思う。

S.Y

「劇場で考える〜ジェンダー・多様性〜」への参加、『妖精の問題 デラックス』の鑑賞を通して、様々なことを感じ考えました。

まず、前者では「自身が気づかないうちに偏見をもっているのではないか」ということに気付かされました。現代社会では、よく「女性は男性よりも差別される立場にある」ということを耳にする上、女性の権利を守る活動がたくさん行われています。しかし、そのなかで私にとってはあまり賛同できないものもあります。例えば電車の女性専用車両です。確かに、女性への痴漢行為が多いと問題視されているため、そのようなことから女性を守るという目的は理解できます。しかし、比較した件数は少ないかもしれないけれど、女性から男性への痴漢もあるため、その点を考慮するならば男性専用車両も作るべきなのではないかと考えます。一方で、かく言う私も「私は女性だから」というような、性的偏見を持っているなと感じた経験もあります。この活動を通して、そのような考えが未だにあるため性差別が無くならないのだなと改めて感じ、もっと性としての他者でなく、ひとりの人としての他者として周りと関わらなければならないなと痛感しました。

次に演劇の鑑賞を通して、特に印象に残ったのは「ブスは人権がない」というテーマのシーンです。そのシーンでは、「ブスだから」という台詞が多く、しかし一方で美人もだめだという台詞もありました。今日では、自分の容姿を悪く言ったり、他者のことを蔑んだりする人々が少なくありません。特にSNSではただ動画を撮影し投稿しただけで、悪意のあるコメントをする人々が多く見受けられます。この演劇を通して、「ブスだから死ななければならないということはない」とどれだけの人が思うでしょうか。きっと、「そんなことない」と思う人がほとんどであろうし、しかしそう思う人の中でも悪意あるコメントをする人が含まれているとも思います。言っていることは同じなのに、フィクションとノンフィクションという意識がある人々が多いため、悪意あるコメントは後を絶たないのだろうなと思います。私も自分自身の問題でもあると捉えて、今一度発言に気をつけていかなければならないなと痛感しました。

今回の経験を通して、自分自身が気づけていなかった、隅にある固定観念や差別意識があるのだなと感じました。劇の最後の対話の会で、市原さんが何度もおっしゃった、「自分自身で考えてみてほしい」という言葉が印象に残っています。この講義のなかだけではなく、日常で、生涯で他者との関わりについて考えながら自分なりに行動をしていきたいと思いました。

H.Y

参加者レポート

「劇場で考える〜ジェンダー・多様性〜」および感想シェア会、『妖精の問題 デラックス』鑑賞、市原佐都子との対話を経て、いま思うこと、感じること（抜粋 / 順不同）

内容として特に気になったことは、芸術という大義名分さえあればセクハラに当たる表現も許されるのか、ということだった。私は不快だったし、それは有意義な不快（モヤモヤ・問題提起）とは違うベクトルの嫌悪感だった。表現者の倫理としてどこまで許されるのかはしっかり考えるべきだと思う。

F.N

私は大学の演劇部に、学部1年から3年の間に音効班員として所属していました。その時の経験と比較した観点から考えると、今回の公演の鑑賞経験では、舞台の使い方やバンド演奏の利用、演者の演技力と言った面にとても感動しました。特に、演劇に生演奏を組み込むという体験は初めてだったため、生演奏のグルーブ感が演劇のライブ感と重なって、より劇の没入感が深まったと感じました。

T.N

プレレクチャーでは、多くの参加者とジェンダー問題について知り考え、意見を話し合うことができてとても刺激的な経験だったと思います。グループワークの中で「SNSで些細な呟きがバッシングを受けているのを見て、自分の意見を人に言いづらい」「間違えてしまうのではという恐怖」というような意見を聞き、それについてそれぞれ思うことを話す場面がありました。思ったことは恐れずに発言して良いという雰囲気の中とても有意義な対話をすることができました。

H.R

内容が内容だったので何とも言えない気持ちになりました。マングルトの話のくだりでのどうして汚いと思うのですかというようなセリフに、排泄物と同じようなもんだからだよと心の中でツッコミを入れてしまうぐらいに舞台の作り方が面白く、引き込まれました。全三部作でそれぞれにどんな意味があるかとかはよく分かりませんでしたが、役者さんの振り切った演技も相まってこれがプロかと感じました。せっかくなら他のプロの作品も機会があれば鑑賞してみたいなと思いました。

ただ公演後の話し合いの時は考える時間が少なかったと感じました。あの演劇を見て、いろんな意味での衝撃を受けて、それを言葉にして、同じ演劇を見た知らない人と議論し、そして新たな視点を得る。自分の中で演劇の内容を昇華するには重要なことだと思います。それにあの演劇は見た人に様々な感想を与えます。だからこそ、時間が足りないと感じました。

Y.S

今回の演劇を実際に体験して、自分の知らなかったことまた初めて知ったことがたくさんあり驚くところまた、感心した場面などさまざまありました。一部で登場した自称ブスを名乗る学生役の二人は不自然撲滅党の噴子さんに対して関心を抱いていて、その憧れを抱くものの私たちはブスだからと言いながら、自分自身の体の特徴、口が臭いや顔が丸い、デブなど自分たちのコンプレックスがあるのにもかかわらず、それらを隠さずなお、それらをネタに取り扱うところは非常に興味深かったですし、面白かったです。

Y.Y

三作品目の「マングルト」では、講師が女性器に牛乳を取り込み発酵させた健康食品「マングルト」の魅力についてレクチャーし、自らこしらえたというマングルトを口にするといった内容でした。自産自消を掲げ、悪さをしない菌をうまく利用し自分に合った物を食べるという点はすぐに理解することができた。しかし、人前で女性器を何度も何度も連呼していることに違和感を感じた。市原佐都子さんはこの違和感を人前で口に出すことを避けがちな女性器などなかなか直視できない、いわゆる見えないものとされている言葉を使い現実世界と対峙させたとおっしゃっていた。私が何か分からない違和感を感じたのは自分の世界ではないものとされているがこの世界では表現されており、それが違和感につながっていた。現実世界ではあまり表現されていない世界線を見ることが出来て面白かった。

率直な感想は内容が難しく、理解に苦しんだ。私は一作品目でなぜバクが出てきたのかが全くわからず市原さんに伺ったところ、特に意味はなくバクが浮かんできたからといった曖昧な回答だった。最初は本人にもわからないのであれば私たちはどのようにこの劇の意図を理解すれば良いのかと思った。しかし、市原佐都子さんとの対話を通して感じたことはあまり答えを作らずに自分の想像力を豊かにすることが大事であることがわかった。

K.Y

各自で勝手に推測するのが劇の面白さなのかもしれませんが、今回の劇に関しては鑑賞者の捉え方に任せすぎていたようにも感じました。大抵の人がぽかんとしていて「この劇はそういうものなのか」と思わせすぎると、内容としては深そうだが結果的によくわからないという感想が生まれてしまうと思います。それが悪いわけではなく、深そうだがよくわからないという感想を生み出すのはそう難しいことではありません。よって誰でもこのような劇を作れるのではないかと思ってしまい、結果的に浅い感想しか生まれませんでした。実際は劇を1から作るというのは絶対簡単ではないし、人が努力して作ったものを簡単に作れそうと言うのは明らかに失礼ですが、今回の劇の内容の難しさはあまり劇を見たことのない人からしたら、ナニコレという感想しか出ないと思います。

T.S

参加者レポート

「劇場で考える〜ジェンダー・多様性〜」および感想シェア会、『妖精の問題 デラックス』鑑賞、市原佐都子との対話を経て、いま思うこと、感じること（抜粋 / 順不同）

第一幕、「ブス」では攻撃的な言葉が大変印象的に残った。ブスは子供を産んではいけない、皆平均を目指すべき、平均であるべき、平均でないものは死ぬべきなど、刺々しい言葉の羅列で精神的に聞いているのが辛かった。不自然撲滅党という現実にはない党が選挙を行っている様子を実際に見せ、まるで現実であるかのような見せ方は斬新だと思った。その見せ方によって自分が洗脳されないか心配になったし、純粋な恐怖を感じた。それほどまでにこの不自然撲滅党に強い印象を持ち、心を掻き乱された。もし不自然撲滅党が実在し、当選してしまったらと思うと恐ろしい。多くの人が「ブス」と認定されてしまい、完璧な人間のみが存在する世界になってしまうのだろう。そうすればつまらない世界になってしまうと思う。人間は欠けた部分があるからこそ補い合い共存することができるのである。それを無くしてしまえばお互いが存在を否定も肯定もしない、無色な世界が生まれてしまうだろう。そんな世界では生きていても何の刺激もないし、快も不快もないから生きることがつまらなくなる。そんな世界よりも私は変化を受け入れる、天才の存在を受け入れることができるこの世界を大切に生きていたいと思った。そしてバクが登場する場面で印象に残っている言葉は「夢は見るものではなく食べるもの」というものである。この言葉がこの劇中で持っている意味は分からなかった。しかし、女子高生が夢の中で自分自身に貼っている、もしくは貼られている「ブス」というレッテルに対して苦悩しているということは理解することができた。また、バクを撃ち殺すシーンが怖かった。銃声やバクの甲高い鳴き声がバクが亡くなることをより鮮明に表していて、とても不快な気持ちになった。自分なりに解釈してみると、この「ブス」という演目を通し、ブスであることを理由に行動や言動を自制することなく、自分らしさを大切にして生きてほしいというメッセージを感じた。

E.Y

私はいままで学校で行われていた講義などはテーマがつまらなく、話を聞かず寝てしまうことが多くありました。しかし、今回のレクチャーはとても興味深い話でとても集中して聞くことができました。そしてなにより有意義な時間だと思ったのは、他大学生などと行うグループディスカッションです。普段同じ大学の人としかグループディスカッションをしないのですが、他大生だけでなく、社会人との意見交換はとても貴重な体験でした。特に学芸員の方の感想にはとても共感しました。「自分の言葉を世界に発信する勇気が必要だと思う。」そのように言っていて、その言葉に私はとても響きました。私は今まで自分の思っている気持ちを言葉で表さないようにしていました。しかし、彼女の言葉を聞いて私は今まで嫌われるのを恐れて逃げているのだなと実感しました。思っていることを言葉にすることはとても難しいですが、大学卒業するまでにその私の課題を解決したいと「劇場で考える〜ジェンダー・多様性」を通して思いました。

S.F

第三部「マングルト」、正直このシーンは気持ち悪いとしか思わなかった。菌は生きるうえで確かに必要かもしれないが例えが耐えられなかった。反応を求められることがあったこのシーンでは私たちがこのような話題について考えたことが少なかったからか、性教育に対する免疫がなくて気まずい感じだった気がした。しかし、このようなあまり知識のない私たちにあたかも当たり前のように話してきたので本当なのかな?と肯定し始めている自分もいた。セミナーとして成立していた気がした。センシティブな内容はタブーだという風潮で育ってきたからこのような気持ちになったのかもしれない違う国の人や未来の子供たちが同じ劇を見たときにどう思うかがとても気になりました。

R.H

正直に言うと、自分は11日のプレレクチャーはピンとこない部分が多かったです。もちろん女流作家の知名度の低さとか、男女の意識の差とかそのほかにも共感できる話はありましたが最初から最後までどこか「他人事」という気持ちがありました。ただその分、3日の演劇は非常に印象的でした。自分の想像していた演劇とは全く違いました。演劇そのものは「不思議」の一言でしたが、その後の対話の時間での意見交換がとても有意義な時間となりました。自分がいたグループは6人だったのですが、驚いたことに全員が全く違う意見を持っていたのです。互いの意見に共感はするものの、それぞれが異なる感想を説明していきました。

自分は妖精の問題デラックスが観客に伝えたかった事は、「考える」という行為そのものだと思います。交流会の中で「バクという特殊な存在がなぜ劇中に現れたのか」や「不自然撲滅党」についての話し合いが行われ、様々な意見が飛び交いました。それらの「演出」自体に深い意味はなく、「なぜあんな演出が登場したのだろう」と観客に考えさせることこそがあの演劇の本質だったのではないかと思います。

この2日間では人間が持つ「常識」やそこからはみ出したものを排斥しようとする意識について考える機会が多かったです。たった2度の学外での授業でしたが、教室で椅子に座って受ける授業よりも得たものは多いと自分は思っています。

I.S

『妖精の問題 デラックス』の鑑賞を終えて、感じたことはとても多いが、それを言語化するのが非常に難しいと感じた。 私は、演劇自体見るのが初めてで、なんとなくミュージカルのようなものを想像して今回の演劇鑑賞に臨んでいたが、ミュージカルとは全く別のもので衝撃を受けた。とにかく衝撃だった。演劇を見終わった後それを誰かと感想を言い合いたいと強く思った。演劇とはとても面白いなと感じた。

F.A

参加者レポート

「劇場で考える～ジェンダー・多様性～」および感想シェア会、『妖精の問題 デラックス』鑑賞、市原佐都子との対話を経て、いま思うこと、感じること（抜粋 / 順不同）

「劇場で考える～ジェンダー・多様性～」への参加、『妖精の問題 デラックス』の鑑賞、市原佐都子さんとの対話を通してジェンダーに関することや、社会全体の問題に関すること等、普段自分が目を向けることが少ない問題について考えることができました。

まず、「劇場で考える～ジェンダー・多様性～」に参加した際には、ジェンダーに関する問題の中でも特に社会的に弱い立場に置かれている女性に関する問題について考えさせられました。日頃女性の方が男性と比べ立場が弱いなどと感じたことや、意識したことはありませんでしたが、美術館の所蔵品に関して男性アーティストのものが多いという実態を知り、今まで自分が知らなかった、知ろうとしなかっただけで自分の身近には思っていた以上に女性が生きづらいと感じる状況があるということに気づかされました。また、社会的に弱い立場に置かれている女性に関する問題を考える上で、生きづらさを抱えているのは女性だけではないということも忘れてはいけないと感じました。男性は女性と比べて、社会的に立場が強く、社会において優遇されやすいと考えられています。しかし、実は男性も女性と同じで生きづらさを抱えており、生きづらさに関しては、社会において優遇されやすいが故、男性の生きづらさの方が女性の生きづらさより、見えないことにされているのではないかと感じました。

今回経験したことは、自分にとってとても意味のある事であったと思います。普段自分が触れない社会の問題に触れることができ、交流を通してこれまでとは違う視点で社会を見ることもできました。また、自分も世の中にある見えないことにされている問題に対して目を向け、可視化していきたいと思いました。

U.M

「劇場で考える～ジェンダー・多様性～」への参加、『妖精の問題 デラックス』を鑑賞して、私は初めてこのような経験ができたのが一番嬉しく思います。劇の鑑賞も初めてですし、他校の生徒たちと一つのことについて意見を述べ合うのも初めての体験でした。基本、このような外部の活動には私は参加しようという意思がなく、そのために知識の幅も狭かったり、世間を狭い視野でしか見ることができませんでした。もちろんこの劇や経験を通して、急に私の考えが一変して変わりました、というのではなく、きっかけになったのは間違いないのかなと思いました。劇自体も一見ストーリー性などがわからないですが、どのような思いを劇に込めたのかという話を聞けたことで、ものすごく深いなと思いました。

劇が終わると、自分があまり得意ではない話し合いの時間が設けられ、劇を見て込み上げることはあるはずなのに、なかなか言葉にして表せないといった体験をしました。

話し合いをする中で、自分が思ったことが言えるのも大事ですが、他の方達の考えや意見を聞けるのはとても貴重で、あーなるほど、と共感できる意見もたくさんあって、自分以外の意見を聞くことの面白さを感じられました。

M.K

参加者レポート

「劇場で考える～多文化共生～」および感想シェア会、『Pamilya（パミリヤ）』鑑賞、村川拓也との対話を経て、いま思うこと、感じること（順不同）

観劇後の対話の時間、ホワイトボードに二度「家族」という言葉が書き込まれた。一度目は、介護士ジェッサさんの愛する家族のことを示した。二度目は利用者側の、面倒を見切れなくなって送り込んだ家族のことを示した。同じ「家族」という言葉が、介護の現場を表現する上で全く違う態度を取っており、恐ろしい構造を見てしまった気がした。

劇中、ジェッサさんが日本で働いている期間中におばあさまを亡くしたことが語られた。ここでジェッサさんが役者ではないことは事実であり、そのことを語る表情、感情はその場限りでないことが明白だった。介護施設では日本語で、声のトーンは明るく、ゆっくりと話している一方、独白のシーンでは母国語で、当たり前だが流暢に語られていて、この姿がジェッサさんのありのままの姿だと感じられた。そうすると反対にありのままではない介護のシーンは「演技」をしているように思われた。しかしこの「演技」は一般的に舞台上の物語の中で役者が行うこととは異なる。目の前で上演されているエトウさんを介護する日々は『Pamilya』という作り物の舞台ではあるものの、ジェッサさんにとっては現実の人生の中で通過した場面であるため、その「演技」は目の前の観客に見せるためのものではなく、介護施設の利用者へ向けられたものなのだ。役者であれば、舞台を降りたら物語の外に出て、自分の人生に戻ることができる。しかし、現実で演じなければならないならば、演技をやめることが人生に与え得る影響は大きい。たとえ本人に演じている自覚がなくとも、本当の感情を隠して過ごすことは演じることと同意だと思う。ジェッサさんはおばあさまを亡くしたことをとても悲しんでいたし、そばに居られなかったことを悔やんでいる様子だった。その気持ちを押し殺して、またエトウさんのもとへ笑顔で向かった。

自分に少し置き換えて考えた。実家である鹿児島で暮らす祖母が突然亡くなったと聞いたら、私は悲しいだろうか、悔しいだろうか。正直、今は目の前の生活、目の前にいる人たちのことしか考えていなくて、遠く離れた、半年に一度会うか会わないかの祖母に関して悲しむことができる自信がない。失って大きな喪失感を感じるほど、祖母への思いは私の心を占めていないのだと思う。だからもし、祖母が人の助けがなければ生活できないような状態になった時は、愛のない決断を下してしまうかもしれない。

こんな私では想像し難いくらいに、ジェッサさん、そのほか働くために日本に来ている外国人の人々は家族を大切に思う気持ちが強いのだと思う。家族を愛しているのに、愛しているから、家族のために離れた場所に行かなくてはならない。矛盾しているように思われるが、これが介護現場の現実なのだと思い知った。

介護施設に家族を預ける人が、家族への愛が全く無いとは思わない。施設に入ることが本人の幸せだと考えて預ける人も当然いると思う。だが、人に対してそばにいて寄り添うこと、遠く離れていても思い合うことを日本人は少し疎かにしてしまっているのではないだろうか。ジェッサさんは遠く離れた家族を思いつつ、目の前のエトウさんに対しても愛を持って接していた。手を叩き返してくれなくなったエトウさんにしばらく休むことを伝えるシーンでは、わざわざ退勤後にベッドに向かい、顔をしばらく見つめ、寂しそうに去る、実際にそういう日があったことが想像された。

日本に来て、介護について学び、日本語を学び、日本人に囲まれながら懸命に働く彼、彼女たちから、私たちはもっと生活に根差した根本的な精神を学ぶことができるのではないだろうか。実際の介護の現場に足を運ぶことができずとも、その精神を今回の観劇で学ぶことができ、この機会に感謝している。

Y.Y

『Pamilya』鑑賞にあたり、まずプレレクチャーで介護業界における外国人雇用の現状を知ったことで、演劇の内容をより噛み締めることができたと思います。プレレクチャーでお話があったように、現在の日本では、介護業界で外国人を見かけることは少ないように感じます。私は認知症高齢者をテーマに研究をしているので、介護施設に足を運ぶことがあるのですが、今まで4箇所訪れた中で、EPAなどの制度を利用して来日されたと思しき方にお会いしたのは、お一人だけでした。近くに日本語学校があるため、アルバイト先にはネパールなど東南アジア出身の外国人が多いのですが、就職先で介護業界というのは聞いたことがありません。私は介護業界への就職を視野に入れているので、自分が働く頃にはもう少し増えているのかな、などと想像しながらレクチャーを受けていました。感想シェア会は、前回同様匿名での意見投稿だったため、感じたことを率直に発することができました。本当は名乗った上で直接言葉にして相手に投げかけることが理想なのかもしれませんが、自分にどんな偏見があるのか、どの言葉だと自分の思いを適切に表現できるのか、どの言葉がこの場に適していないのか、という部分がレクチャーの2時間だけでは整理しきれなかったので、このシステムはとてもありがたかったです。

続いて、公演の鑑賞含めその後一連の流れについてですが、私は対話の時間に参加することができませんでした。そのため、自分なりに感じたことをレポートにまとめます。

タイトルにもなっているように、テーマが「家族」だったため、鑑賞前は「ご利用者さまも家族のような存在！」という流れになっていくのかなと想像していました。しかし鑑賞してみて、伝えたかったことはそうではないのではないかと感じました。どんなに普段会う時間が長くても、どんなにその方が好印象でも、主人公が「介護職員」として接している利用者は、主人公が「わたし」として接している家族（血の繋がりの有無に関わらず、いわゆる辞書的な「家族」として繋がっている親密な人々）を超えることはないのだなというのが、真っ先に浮かんだ感想です。ただ、利用者より母国にいる家族のほうが大切だと言いたいわけではありません。おそらく、愛の種類が違うのだと思います。主人公が「介護職員」として利用者に向ける愛と、「わたし」として母国にいる家族に向ける愛はそれぞれ別物なのではないでしょうか。それは同時に成り立つべきものなのに、主人公は仕事のため、つまり利用者への愛のために、母国にいる家族への愛を諦めなければならない場面に度々ぶつかってしまった。そのことが、ラストシーンの主人公の語りに結びついてくるのではないかと思いました。

人は、全く同じ感情のベクトルを複数の他人に向けることはなく、ありとあらゆる感情のベクトルがバランスよく均衡を保っているからこそ、満ち足りた生活を送ることができるというのが私の持論です。ベクトルのどこかが欠けると、欠けた部分への不安に駆られてしまいます。あのとき祖母の元に行くことができていれば、娘と一緒に暮らすことができていれば、もしかしたら利用者や介護業界に対する感情もまた変わっていたのかもしれないと感じました。もし私が介護業界に身を置くことになったとき、利用者への愛と家族への愛、その他たくさんの、自分にとって大切な人やものへの愛を、自分なりにバランスよく、それぞれ全てに注ぐことができたら、これ以上ない幸せだと思います。取り留めのない感想になってしまいましたが、鑑賞できて良かったです。機会があれば、鑑賞した他の方のお話も聞いてみたいと思いました。

H.S

参加者レポート

「劇場で考える～多文化共生～」および感想シェア会、『Pamilya（パミリヤ）』鑑賞、村川拓也との対話を経て、いま思うこと、感じること（順不同）

ミュージカルや舞台を鑑賞するのが好きで、様々な作品を見たい、もっと深く知りたいと考えユースプログラムに参加した。このレポートでは3つのプログラムに参加して感じたことや新たに発見したことをプログラム別にまとめる。

プレレクチャー「劇場で考える～多文化共生～」

このプログラムは作品の背景の一つである多文化共生をテーマにしたトークイベントだ。外国人介護士育成・就労支援を行う田中優子さんとフィリピン人の妻を持つ田中俊明さんが取り組んでいる事例や現地の人々の文化や生活を紹介した。外国人の介護士を受け入れるための制度や勉強内容、現地の生活や性格などネットや本ではなかなか知ることのできない貴重な話を聞くことができた。家族のために知らない国で勉強し、働いている人が多くいること、そしてそれがフィリピンの人にとって当たり前であることに一番驚いた。

『Pamilya』

この作品はフィリピン出身で元介護士のジェッサさんが観客の中から選ばれた1人の女性を介護し、タガログ語で自分自身や家族について語っていく舞台だ。黒い舞台セット、少ない登場人物、効果音やBGMがないことから序盤はシンプルで静かな舞台だと感じた。しかし、ジェスチャーや衣装の変化をヒントにしながら実際の施設を想像するのは思ったより簡単で、セットが少なくても成立することが自分の中で一番印象に残った。

鑑賞後の対談

プログラムの参加者同士でパミリヤを見て感じたことや疑問をまとめていった。とくに介護される役を観客から選ぶ理由をシェアしたとき、自分とは真逆の考えの人もおり、解釈の多様さに驚いた。

演出の村川拓也さんに質問に答えてもらった。一番驚いたのはハンドマイクを使うときと使わないときがある理由だ。自分もおそらく参加者も考えつかなかった返答でとても驚いたし、聴くことができて本当に良かったと思った。また、対談の時間の後に個人的に質問に行き、話したときに「演劇作ってみればいい」といわれたことから、演出に興味を持つことができた。

まとめ

この3つのプログラムを通して介護や外国人労働者の現状やフィリピンの文化、生活を知ることが出来た。また、演出や会場の大きさなど今まで見た舞台とは違う部分が多く自分の世界を広げることが出来た。来年も参加したいと思う。

I.M

私はこの事業に参加して今感じていることが2つほどあります。

まず1つ目としては、演劇の果たす役割については、人それぞれの受け取り方があると感じました。私はこの演劇を鑑賞する前は、役者の方の演じ方について注目してみようと思っていました。ところがいざ劇が始まってみると、観客の中から役者を募集するという度肝を抜かれるような手法が待っていました。これを受けて、私自身の中でこの演劇に対する姿勢が変わりました。役者の演じ方だけではなく、訓練された介護者役の方の演技だけでなく、全く訓練を受けていない方が舞台に立つことで、それが演劇にもたらす効果について考えながら見ようという心構えに変わりました。このような私の演劇鑑賞に対する姿勢もある一方で、終演後の「対話の時間」では、劇に関して全くの素人を、舞台に挙げる意義について考えている人もいれば、この演劇を通じて、何かを自分自身に重ねて思いを巡らせる人、また、演劇から訓練を受けていない役の人が生み出す違和感について着目し、その違和感から何か考えるきっかけを得ようとする人など、演劇鑑賞一つを取っても、多くの接し方があるのだと感じました。

2つ目ですが、「プレレクチャーおよび感想シェア会」「公演の鑑賞」「対話の時間」の全ての回を通じて、介護現場の現状についての私自身の理解を深めることができたのではないかと感じています。プレレクチャーでお話があったように、既に世界では外国人が介護をする環境というものがほとんど当たり前になっている状況の中で、日本はかなり外国人の介護者が少ない印象を受けました。しかしながら、それでも現実として介護現場では人手が圧倒的に足りておらず、外国人の手を必要としている状況で、実際に現場で働いている様子を演劇で再現されると、これほどうまく介護者と被介護者でお互いの関係が適応しているならば、もっと外国人の介護士に頼ってもいいのではないかと感じました。確かに、お互いが持っている価値観や文化は違えども、そこに助ける人、助けを必要とするという関係性が存在し、その関係性が深くなれば、自ずと文化の違いは相互理解をしようと努力する中で、ある程度解消されていくのではないかと感じました。

H.K

参加者レポート

「劇場で考える〜多文化共生〜」および感想シェア会、『Pamilya（パミリヤ）』鑑賞、村川拓也との対話を経て、いま思うこと、感じること（抜粋 / 順不同）

12/17（土）に村川拓也氏の舞台『Pamilya』を鑑賞した。スケジュールの都合上プレレクチャーや対話の時間に参加できなかったのが残念ではあるが、公演を鑑賞して思うことを率直に書き連ねたい。

若い者の間で「老害」という言葉が浸透して久しい。読んで字の如く、老いて社会に害を与えるようになった者を指す蔑称である。上の世代が作り上げた日本の閉塞感などもあるだろうが、そうした社会的な話と個々人に向ける感情が混同しているケースも多い。いつかは自分も老いを迎えるというのに（そういう人に限って論理の整合性を取るためか「長生きせずに死にたい」などと自らの生を粗末にしがちであったりもする）。

舞台中で介護されているエトウさんを見て、私が1年前に身体を悪くして手術した時の姿が重なった。身体が悪くなる、思うように身体が動かないということはかなりの苦痛だ。つい数日前まで出来ていたことが全く出来なくなるのはある種の屈辱すら感じる。そんな時、ただ一つ思うことは「早く身体を良くしたい」という生への想いだけだった。

恐らく老いて介護される者も似たような思いなのだろう。老いに抗うことは難しい。身体は悪くなっていくばかりかもしれないし、その前に記憶が覚束なくなるかもしれない。それでもきっと「1日でも長く生きていたい」と思うのだろう。そしてそんな人々の尊厳を最後まで守り続けられるのが介護士という仕事なのだろう。

「1人のおばあちゃんすら守れないのにたくさんの利用者さんを守れるか」という言葉が印象に残った。私は長野の実家に還暦過ぎの両親を残して遠い福岡の地で生活している。距離と忙しさを言い訳にして疎遠になっているが、いざという時に「家族」であり続けられるのだろうか。そう遠くない将来を見つめ直す70分間だった。

O.Y

『Pamilya』に関わる事業を通して、生きることについて考える時間が増えました。というのも、実際の介護の現場を再現した公演を鑑賞している間に、過去に入院をした経験を想起しただけでなく、私自身が高齢になり介護を必要となった将来についての想像をしたからです。公演中、最初に感じたことは、介護をされている側の人は幸せなのかなということでした。私自身、とても恥ずかしい思いをした時や他人に大きな迷惑をかけた時、高校時代に交通事故に遭ったが一命を取り留めて入院をしていた際などに、「このまま楽に死なせてくれ」と思うことは何度かありました。もし、私自身が介護を必要とする状況になった場合は、生きたいと思うより、大切な人たちに迷惑をかけているという思いから死にたいと思うのではないかなと考えました。

T.N

公演の当日（～対話まで）はただもやもやとしたネガティブな感情だけが残っていた。しかし、時間を経て（昨日25日の対話も含めて）、自分が何にもやもやしていたのかが少しずつ整理されてきた。

自分の感情面では、「かわいそう・頑張っているね」という気持ちだけでは語り尽くせない、済ませてはいけないところをどう表現したらいいかがわからなくてもやもやしていた。また、理性的なところでは、日本の外国人労働者に関するシステムの整っていなさと日本人の考える「家族の概念」とは、の2点がうまく整理されずにもやもやしていた。そして観点として、どこを見てどう受け取るのがよかったのか、もっと噛み砕いて言えば、どこに着目したらよかったのかがいまいち掴み切れずにもやもやしていた。（昨日の振り返りの際にも話したが、ここが学校だったら、公演後すぐに感想を書かされるだろうし、きっとうまく言葉にできなくて「もやもやした」とだけ感想を書いて、先生に「どういうことだ」、と詰問されていたかもしれない。）

少し時間が空いて、今ふりかえると、舞台（演劇も音楽も）と客席、つまり見られる側と見る側には大きな隔たりがある事を再認識させられた。最初の6月のワークショップでは、日常の再現の延長線上に演劇はあり、日常と演劇は紙一重だと感じたにもかかわらず、日頃見ている演劇は隔絶されていると考えずにはいられなかった。その意味で、その壁を取っ払おうとした『パミリヤ』は革新的だと思った。

H.M

私は、これまでわかりやすいストーリーの作品ばかりを観てきました。これまでの私にとっての“観劇”はプロの俳優が完璧に作り込んだものを、観客として受動的に受け取るイベントでした。そのため、『Pamilya』にまつわる一連のレクチャーや対話、観劇体験はこれまでの固定観念を塗り替えていく時間でした。

特に、『Pamilya』自体が色々な意味を持った、解釈や受け取り方が複数存在する作品であることから、対話の時間はとても有意義な時間でした。特に、マイクを用いた理由として「マイクを持って話すことで動作とセリフが切り分けられ、より動作の美しさが際立つ」という観点は、自分一人で観劇をして、勝手に考察をしているだけでは辿り着けなかった視点であり、対話の時間があったからこそ学べたことでした。また、事前にプレレクチャーにおいてフィリピンの文化や介護福祉士の現状についてお聞きしていたことで、作品自体の解釈がしやすくなったと感じています。

次に、作品自体の表現方法も非常に面白く、学びが多かったと感じています。あえて客席からエトウさんを選び、客席と舞台をつなぐ表現手法によって、より観客の想像力がかき立てられたり、人間同士のインタラクションがより強調されたりしており、面白いなと感じました。作品が進むにつれて、独白部分やセリフでジェッサさんやエトウさんのパーソナルな情報が明かされていくにつれて、エトウさんを演じている方の反応も少しずつ変化していたように感じ、そのことが作品のテーマでもある人と人の関わりをより強く印象づけていたと思いました。自分自身も作品を制作することがあるのですが、無意識に舞台と客席を分けて考えていたと『Pamilya』を通じて感じたため、今後は観客を巻き込んだ制作を意識したいなと思いました。

K.T

参加者レポート

「劇場で考える〜多文化共生〜」および感想シェア会、『Pamilya（パミリヤ）』鑑賞、村川拓也との対話を経て、いま思うこと、感じること（抜粋 / 順不同）

今回『Pamilya』を観劇し、最初に日本の介護業界のやるせなさを感じた。主人公のジェッサさんが介護福祉士としての一日を描かれていたが、後半の「介護する老人」という仕事上の関係（顧客）であるが家族同然に接するというジレンマを感じており、だんだんと元気のなくなっていく介護する老人を置いて国に帰る選択をしていた。また、ジェッサさんはおばあさんとの別れを見届けることができなかった過去がある。事前のワークショップで学んだこととして、フィリピンは家族のことを日本以上に大切にする国民性があり、ジェッサさんは日本への出稼ぎによって親しい人との永遠の別れだけではなく、国民性に対する裏切りも感じていたと思われる。また、出稼ぎによって自分の娘とも離れ離れになり、娘か介護職（お世話する老人）かを選ばなければならないジレンマも抱えている。このように、今回の作品を通して、仕事の性質上、そしてフィリピンの国民性から親しい者の死を含む犠牲を選択せねばならないやるせなさを感じた。

また、演出に私は感動した。演劇は2人が登場人物として出てくるが、この内、介護される高齢者役は最初に観客から募集していた。今回は情勢上叶わなかったが、役者を全くの素人から最初に募集していく形態に驚かされた。私は最初そういう演出にした理由を知りたくなった。私自身は、介護は誰にでも起こりうるものだから、それの表現として観客を募集していたのかと思っていたが、脚本の村川さんが語って下さった数個の理由の中で、「介護の肌に触れる緊張感をリアルにするため」という理由が一番感動した。これは村川さんの初の作品『ツァイトゲーバー』の着想時からスタートしており、この「密着する緊張感」に気付ける観察眼に驚いた。私も表現者として、このような繊細なことを具現化する演出を磨いていきたいと感じた。

F.S

なんというか、思ったよりも筋書きがスッキリとしている。介護、外国人、対話、「新しい」というと、モヤモヤしたものを受け止めて帰るのが適正なのだろうが、どうしてもちょっと違った。ジェッサさんが行う日々のなにげない介護の所作、その合間にさしこまれる彼女の母語での心情の吐露、介護される側の状況の変化。これら自体にストーリー性はなく、時間と季節の流れ以外は断片的に示される。ストーリー性はないのに彼女たちはどうやって「家族」になるのか。この提示の仕方に、よくある演劇のような作為を感じた。

確かに断片的だ。介護される人の娘が面会に来たくだりとは遠く離れたタイミングで、ジェッサさんの娘の存在が独白で登場する。移動、食事、排泄、一人ではなんでもないことを介助する時にありがちなこと（おそらくは介護関係者と思われる人たちが控えめに、しかししっかりと笑っていたのが確認できた）が随所で示される。日々の光景のなかで、役人もかくやと外国人介護士に関する制度の説明が滔々となされる。

存在するのは結局所作の堆積であって、物語ではない。しかし一点だけ、明確に物語が存在した場面があった。《瀬戸の花嫁》を歌った箇所だ。この歌は介護する／される者を繋ぎ、異国にいる／故国で待つ者どうしを繋いだ。仕事としてやってきた国の少し古い旋律は、さも生まれ故郷の懐かしい歌であるかのように歌われる。本来家族ではない介護する／される者、本来家族だが一緒にはいられない者。ジェッサさんが単に存在するというだけでは「家族」として成立しない人たちが、少しばかりの節回しだけで「家族（Pamilya）」になった。

オチは明示されないからモヤモヤするかもしれない。しかし、仕事を取ったとしても、故郷を取ったとしても、最後のジェッサさんの表情はスッキリとしているように見えた。もしかしたら、そう見せたいという作為の存在を真に受けて、私はスッキリしたのかもしれない。

K.M

参加者レポート

「劇場で考える〜多文化共生〜」および感想シェア会、『Pamilya（パミリヤ）』鑑賞、村川拓也との対話を経て、いま思うこと、感じること（抜粋 / 順不同）

1 プレレクチャー・感想シェア会

プレレクチャーでは、日本における外国人介護職の現状を知り、フィリピン人の方々の国民性を知ることができた。これらは、本公演での娘に対する思いを述べるシーンなどを考察するのに必要な情報であったように思える。感想シェア会では、人の数だけの観点・感想を聞くことができ、新たな視点に気付かされた。

2 公演の感想

正直なところ、内容があまり入ってこなかった。というのも、他の鑑賞者の方々が発言されていたような介護への親近感がなく、ドキュメンタリーとして他人事として感じられた。ゆえに今回のようなプログラムがなければ、自分から進んで鑑賞しようと思わない作品であったため、貴重な体験であったと思う。ステージ上の出来事と観客の関係性という点でも問いかけのある作品であったが、公演中に私が最も注目していたのは、観客のリアクションおよびその観客のバックグラウンドである。先に述べたように、私は介護に親近感を持っていないため、本公演を鑑賞している最中に笑いが出たり、涙を堪えるアクションをとっていたりする方々の暮らしがどのようなものかが想像がつかない。このような方々が本公演の鑑賞を経てどのようなことを感じ、考えたのか非常に興味が湧いた。

3 対話の時間

公演で感じたこと、および本プログラムを通しての感想や思いを表現しあう機会であった。鑑賞した2つの作品が一筋縄ではいかない深さを孕んだものであったため、対話の時間を通して他者の解釈を知り、自身の考えを深めることができた。現代音楽の鑑賞にも通ずるものであるが、鑑賞者や社会に対して問いかけがあったり、解釈に幅があるような作品を鑑賞する際には、このような時間が必要だと感じた。

M.Y

ユースプログラム参加者へのアンケート分析の結果

集計・分析：長津 結一郎（九州大学大学院芸術工学研究院准教授）

ユースプログラム参加者には毎回のプログラム終了後にアンケートをとった。ここではそのアンケートのデータを用いた分析を紹介する。
アンケートは各回ごとに取り、延べ回答数は111件あった。このうち欠損値があった5件を除き106件に対して分析を行った。アンケートは自由記述のほか、以下の項目に対してそれぞれ5段階評価をしてもらった。

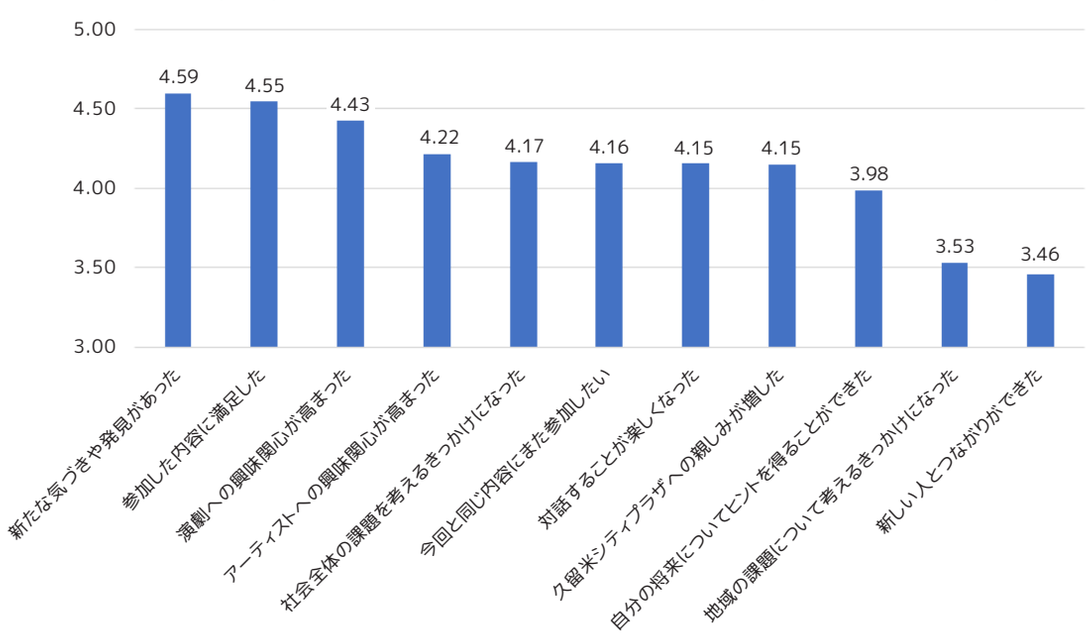
Q1　参加した内容に満足した
Q2　今回と同じ内容にまた参加したい
Q3　新しい人とつながりができた
Q4　演劇への興味関心が高まった
Q5　アーティストへの興味関心が高まった
Q6　久留米シティプラザへの親しみが増した
Q7　自分の将来についてヒントを得ることができた
Q8　新たな気づきや発見があった
Q9　対話することが楽しくなった
Q10　地域の課題について考えるきっかけになった
Q11　社会全体の課題を考えるきっかけになった

■全体的な満足度

まず全体のアンケート結果を平均すると、図1のようになった。

このことからは、「新たな気づきや発見があった」「参加した内容に満足した」「演劇への興味関心が高まった」といった項目が高く評価されている一方、「地域の課題について考えるきっかけになった」「新しい人とつながりができた」という項目については比較的低い評価となった。これらを踏まえると、全体的な評価は高かった一方で、受講生同士の新しいつながりをつくるためのプログラムは冒頭のワークショップで準備されてはいたが、そのつながりが十分に後半に至るまで確保しきれなかったという課題も浮かび上がった。

〈図1〉ユースプログラム参加者のアンケート結果（全回の回答の平均値）

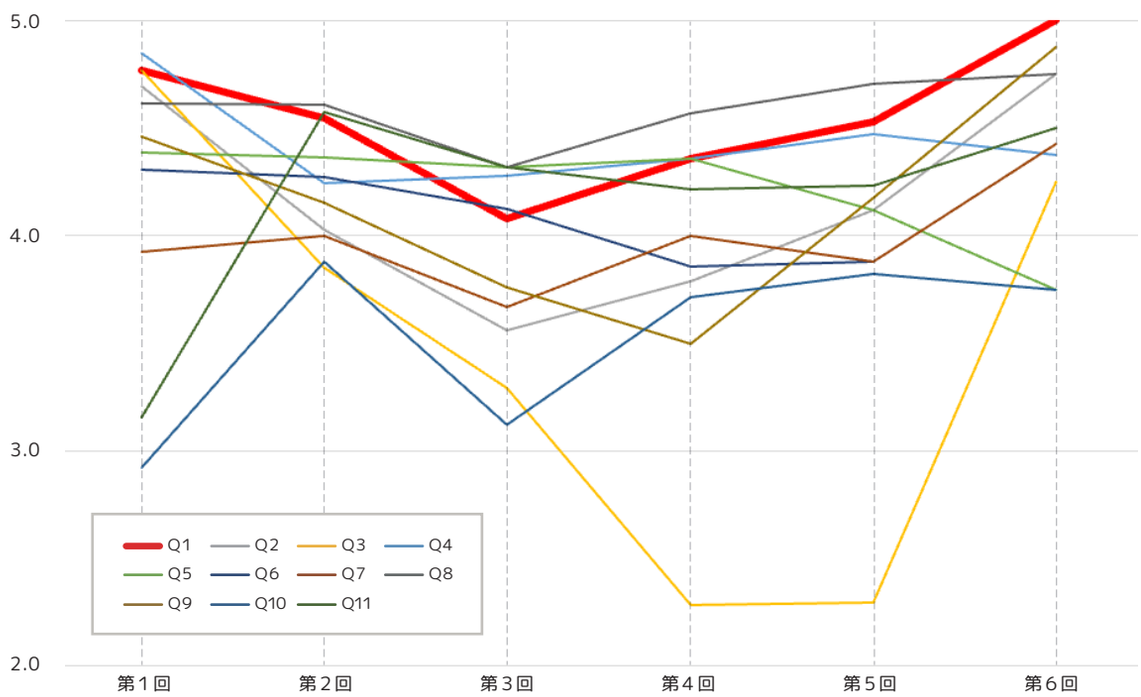


次に、全6回における各回答の平均の推移を図2にまとめた。この結果からは次のようなことがわかる。

・概ねほとんどの回答が同じような推移であるが、Q3「新しい人とつながりができた」については第4回・第5回がほかと比較して顕著に低い。
・全体の推移を見ると、第3回で大きく落ち込むも、その後のプログラムでは持ち直し、第6回についてはほとんどの回答が非常に高い。
・常に平均が4.0を下回ったのは、Q6「久留米シティプラザへの親しみが増した」である。

このことからは、平均的な満足度は非常に高いことがうかがい知れた一方で、必ずしも久留米シティプラザに親しみを生み出すことや、新たな人と人とのつながりを生み出すプログラムにはなっていなかったことが推察できる。

〈図2〉ユースプログラム参加者のアンケート結果（全体）

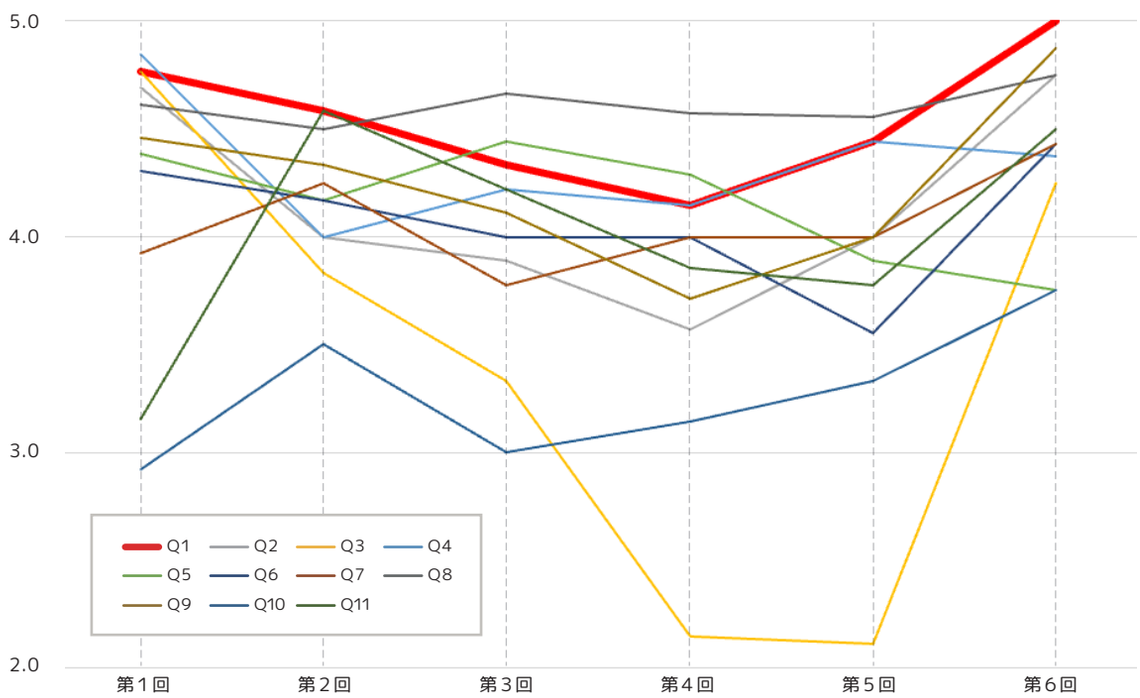


ただし今回のプログラムは、第2～3回のみ、もしくは第4～5回のみの参加者も多かったため、通しで受講を希望していた参加者にとってはどうだったかを改めて抽出したのが図3である。
この結果からは次のようなことがわかる。

・全体的な平均値は通し受講者以外も含めた数値よりも高い。
・全体の集計では第3回でほぼすべての項目が落ち込んでいたが、こちらではQ2「今回と同じ内容にまた参加したい」、Q4「演劇への興味関心が高まった」、Q5「アーティストへの興味関心が高まった」の値がやや上昇している。
・逆に第5回では全体の集計はほぼすべての項目が上がっていたが、こちらではQ5「アーティストへの興味関心が高まった」、Q6「久留米シティプラザへの親しみが増した」がやや下がっている。
・第6回についてはほとんどの回答が非常に高い。

このことからは、第3回（『妖精の問題 デラックス』鑑賞と対話の時間）については大学授業としての参加者を除くと、満足度はやや低下していたものの、演劇やアーティストへの興味関心をさらに高めるような時間になっていたことがわかる。一方、第5回（『Pamilya』鑑賞と対話の時間）では満足度は全体的に高かったが、久留米シティプラザへの親しみやアーティストへの関心は十分に喚起していなかったことが推察される。

〈図3〉ユースプログラム参加者のアンケート結果（大学授業のみの参加者を除く）



■「新たな気づき」「対話」によって満足度が生まれていた

最後に、ユースプログラム参加者の満足度の要因を探るため、参加者の満足度「参加した内容に満足した」という回答（Y）を目的変数とし、以下の回答を説明変数として重回帰分析を行った。

- 今回と同じ内容にまた参加したい（X_1）
- 新しい人とつながりができた（X_2）
- 演劇への興味関心が高まった（X_3）
- アーティストへの興味関心が高まった（X_4）
- 久留米シティプラザへの親しみが増した（X_5）
- 自分の将来についてヒントを得ることができた（X_6）
- 新たな気づきや発見があった（X_7）
- 対話することが楽しくなった（X_8）
- 地域の課題について考えるきっかけになった（X_9）
- 社会全体の課題を考えるきっかけになった（X_{10}）

この結果から重回帰式は以下のように得られた。

$$Y=1.337+0.366X_1+0.197X_7+0.128X_8+0.112X_3+0.055X_2+0.050X_{10}+0.039X_6-0.011X_9-0.059X_4-0.125X_5$$

修正済み決定係数は 0.6177 となり当てはまりがやや良い回帰式となった。また P 値は X_1、X_7、X_8 は 1% 有意で説明力のある変数といえるがそれ以外は説明力がないと判断できる。ただし P 値は X_6 と X_9 を除けば比較的低いため、ある程度の説明力がある変数が選択されているともいえる。

この分析からわかることは、「参加した内容に満足した」という回答に比較的寄与しているのは、「今回と同じ内容にまた参加したい」「新たな気づきや発見があった」「対話することが楽しくなった」という回答だということである。すなわち、「今回と同じ内容にまた参加したい」「新たな気づきや発見があった」「対話することが楽しくなった」という回答に高い評価をつけている人ほど、「参加した内容に満足した」の回答が高くなっているということである。このことからは、対話の時間やプレレクチャー、さらにはアーティストによる表現を鑑賞することによる新たな気づきや発見が起こること、そのことを踏まえて今回と同じ内容にまた参加したいと思うきっかけがあることが、満足度につながっていることが推察できた。
一方、説明力については疑問も残るものの、「地域の課題について考えるきっかけになった」「アーティストへの興味関心が高まった」「久留米シティプラザへの親しみが増した」といった回答は満足度に直接関係がないという結果になった。このことからは、プログラムの中で久留米シティプラザやアーティスト自身のこと、地域課題のことなどを十分に深掘りしたプログラムにはなっていないという点が、満足度と結びつかなかった要因ではないかと推察される。

■ユースプログラムの総括

全体的な評価は高かった。
平均的な満足度は非常に高いことがうかがい知れた。
対話の時間やプレレクチャー、さらにはアーティストによる表現を鑑賞することによる新たな気づきや発見が起こること、そのことを踏まえて今回と同じ内容にまた参加したいと思うきっかけがあることが、満足度につながっている。

第3回（『妖精の問題 デラックス』鑑賞と対話の時間）については大学授業としての参加者を除くと、満足度はやや低下していたものの、演劇やアーティストへの興味関心をさらに高めるような時間になっていたことがわかる。
第5回（『Pamilya』鑑賞と対話の時間）では満足度は全体的に高かったが、久留米シティプラザへの親しみやアーティストへの関心は十分に喚起していなかったことが推察される。

受講生同士の新しいつながりをつくるためのプログラムは冒頭のワークショップで準備されてはいたが、そのつながりが十分に後半に至るまで確保しきれなかったという課題も浮かび上がった。
プログラムの中で久留米シティプラザやアーティスト自身のこと、地域課題のことなどを十分に深掘りしたプログラムにはなっていないという点が、満足度と結びつかなかった要因ではないかと推察される。このことからは、一方で、必ずしも久留米シティプラザに親しみを生み出すことや、新たな人と人とのつながりを生み出すプログラムにはなっていなかったことが推察できる。

寄稿

久留米大学文学部「異文化体験実習II」との連携

神本 秀爾（久留米大学文学部国際文化学科准教授）

※久留米大学文学部「異文化体験実習II」の学生は、2 3 に参加しました。

久留米シティプラザのユースプログラム「新しい演劇鑑賞教室」には、文学部国際文化学科開講科目の「異文化体験実習II」履修者が参加した。この科目は本来、学生が自主的に企画しておこなった国内外での活動を単位認定することで、異文化に意欲的に向き合う機会をつくることをひとつの目的として始まったものである。しかし、そのような活動が停滞することを余儀なくされていたコロナ禍の2022年度、「異文化体験実習II」を「新しい演劇鑑賞教室」と連携させることで学科学生が参加したプレレクチャーや観劇体験は、貴重な学びの機会になった。

連携が決まった当初、久留米市に所在する大学の学生が久留米シティプラザの演劇鑑賞教室に参加することは、果たして異文化体験と呼べるのかとの声もあった。しかし、ヒト・モノ・情報がひとところにとどまることなく移動を続け、接触するだけでなく相互に変容し続けることが常態化している現代社会において、異文化が地理的・空間的に離れたところにのみ存在するわけではないことを、わたしたちは日々実感している。むしろ、近年は「分断」という言葉で表現されているように、同じ地域に暮らすひとびとであっても、性差や職業、趣味や嗜好などによって異なる現実を知覚し、生きているというのが実情だろう。このように考えるならば、芸術専攻や演劇関連の科目を設置していない本学の多くの学生にとっては、久留米シティプラザも演劇も、距離的には身近な異文化に他ならないと考えることには十分な妥当性がある。

以上のような背景から、報告者は2022年度前期に「新しい演劇鑑賞教室」に参加することを主たる目的として「異文化体験実習II」を開講することになった。履修者は計13名で 2年次生３名、3年次生８名、4年次生２名であった。なお、久留米市出身だという学生を含め、ほとんどの学生に久留米シティプラザでの観劇体験はなく、そもそも足を踏み入れたこともないという学生がほとんどだった。それでは、履修した学生たちにとって、「新しい演劇鑑賞教室」に参加した経験はどのようなものであり、その経験はどのように評価できるのだろうか。

6月11日のプレレクチャーは「実践事例紹介」「ディスカッション」「感想シェア」という流れだった。大学の講義では学生の理解を確かめたり、感想を知るためにコメントシート（リアクションペーパー）を配布したりする授業は少なくない。しかし、このプレレクチャーで設けられていた、ひとつのテーマを切り口に他大学の学生や一般からの参加者と意見を交換したことについては、事後の個別のやり取りを含め多くの学生からポジティブな経験として語られていた。これもまた異文化体験である。

7月3日には『妖精の問題 デラックス』の鑑賞のあと、市原佐都子氏との対話という流れだった。本作品は、一般的には大っぴらに語られることが憚られる差別や偏見に正面から取り組んだものである。このような差別や偏見には時間をかけて醸成されたものがあれば、急激に支持を得るようになったものもある。差別や偏見について語ることを「寝た子を起こす」行為ととらえる立場があれば、社会の風通しを良くするための種を蒔く行為ととらえる立場もある。当然のように本作品は後者に関わるものととらえるべきであり、観劇体験を通じてその場にいたひとびとに得られた（あるいはその場にいることで強制的に託された）「もやもや」のいくつかは、個々人の日々の営みや言動を通じて、いつの日かそれぞれにとって納得のいく答えに出会うことで昇華されていくようなものだろう。

「異文化体験実習II」履修者が提出した感想文を読んだり、個別の対話を通じて聞いたりしたなかで広く共通しているのは、非常にインパクトの残る観劇体験だったということである。作品中の表現に強烈さがあったことも大きく影響していると思われるが、演劇そのものにそなわった力にも由来していたと考えられる。履修者の多くにとっては初めての観劇体験であったため、「演劇の見方」そのものを知らず、劇中で語られている台詞のどこからどこまでが真実で、どこからどこまでがフィクションなのかの区別に混乱しているものもいた。出演者の体の使い方やパフォーマンスそのものに感動を覚えたというものもいた。出演者から語りかけられた際に、どのように反応して良いのか悩んだというものもいた。市原佐都子氏、ドラマトゥルクの木村覚氏からの観劇体験に正解はなく、早急に答えを求めるようなものでもないという趣旨のコメントも、最短でゴールにたどり着く方法を探してしまいがちな世代にとっては新鮮なメッセージだったのではないだろうか。

未知のものに出会ったとき、わたしたちはそれまでに蓄積してきた自分の知識を総動員して対処を考える。久留米シティプラザのユースプログラム「新しい演劇鑑賞教室」への参加は、大学の授業という名目ではあったが、履修者にとっては一般の講義形式ともゼミ形式とも異なるかたちで、自身にとって慣れ親しんだ世界の自明性について考え直す重要なきっかけのひとつになったと考えている。「異文化体験実習II」という科目を通じての連携は2022年度限りだが、科目担当教員の実感としては、このような連携は非常に有意義なものであった。今後も何らかの形で継続できるものであることを期待したい。

寄稿

九州大学大学院「スタジオプロジェクト」との連携

長津 結一郎（九州大学大学院芸術工学研究院准教授）

九州大学は複数のキャンパスがあるが、芸術について特に専門的に教育研究を行っているのは、西鉄久留米駅から大牟田線を北上した先にある大橋キャンパス（福岡市南区）である。このキャンパスには芸術工学部（学部）・大学院芸術工学府（大学院）・芸術工学研究院（教員組織）などが設置されている（2003年に「九州芸術工科大学」が改組となり誕生した）。2020年に学部、2022年には大学院が改組になり、アートやデザインの分野において、より現代の社会的ニーズを意識した教育研究の実践が試みられている。

その中で、大学院芸術工学府の学生向けに2022年の改組をもとに新設された科目「スタジオプロジェクト」がある。学生が普段専門的に研究している内容や関心のあることを活かして、大学内にとどまらない様々なプロジェクトを提案、実施することを推奨している科目で、同時に複数のプログラムが開講されている。

今回の「新しい演劇鑑賞教室」は、私が担当するスタジオプロジェクト「聴覚障害のある人にとってのコンサートのあり方を考える」の受講生たちに参加してもらった。このプロジェクトは、大学院の副専攻のような形で芸術工学府の学生が受講できるアートマネジメントのプログラム「ホールマネジメントエンジニア育成プログラム」に関心を持つ学生が受講することになっていた。実際の受講生たちは直接演劇を専門としていない学生がほとんどで、演劇に関心を持たない学生も多く受講していた。この企画に参加してもらったのは、受講生たちがアートマネジメントの実践を行う場が学内だったため（2023年2月4～5日に、聴覚障害のある当事者団体と協働したワークショップイベントを実施）、実際の文化施設で行われる実践を知ってもらう格好の機会と捉えたためだ。当初は『Pamilya（パミリヤ）』に関連するプレレクチャーと公演のプログラムのみを参加対象と予定していたが、希望する学生にはユースプログラム全体にも参加してもらった。

前置きが長くなったが、実際に学生に参加してもらっての印象を簡単に述べたい。

『妖精の問題 デラックス』については、演劇を初めて見る学生にとっては衝撃が多い内容であったようだ。学生たちの多くは、社会課題に対して比較的関心を持っている。もちろん普段はそういったことについて、文章、SNS、プレゼンテーションなどの表現方法で受け取ったり、自らが表現したりしているだろう。ただ今回の作品はそれとは違い、演劇の手法を用いて、あるときはフィクションを混ぜながら、またあるときはメッセージを曖昧に表現されながら舞台上に展開される内容に、目を白黒していた学生も多かった。ただし、学生を対象にするのだから、もっとわかりやすいストーリーの演劇を題材にしたほうが良かったのではないか、とは私は考えていない。あえて「わからない」「衝撃的な」作品を目の当たりにすることと、それを受け入れ楽しむ観客たちと共に鑑賞することを通じて、「自分はこの作品鑑賞体験をどのように受け止めたらいいのか？」と考え込むことになる。そのような思索の機会は、大学の学内ではほとんど存在しない。実際、公演後のアンケートなどを見ると、多くの学生は戸惑いを素直に言葉

にしていた。どう見たらいいのかわからないものを、見て、考え始めることこそが、芸術鑑賞の醍醐味であり、その入り口に立ってもらうことができたプログラムだと確信している（このような勇気を持って取り組むことができるのは、『妖精の問題 デラックス』や演出の市原佐都子が芸術の業界で一定の評価を受けているということがもちろん前提にある）。また、普段は音響技術や舞台機構について研究をしていたり興味がある学生も多いため、舞台面の作り方や音響面について思うことがあった学生もいたようだった。
『Pamilya（パミリヤ）』については私自身がドラマトゥルクとして関与した作品でもあり、学生にその体験を共にしてもらうことで、普段は教員として振る舞っている私が作品と関わる際に考えていることを知ってもらうことにもつながり、大変ありがたい機会だった。学生との関わりで特に印象に残っているのは、公演後の「対話の時間」だ。作品を見たことで湧き上がった疑問や意見、考えが、学生たちから矢継ぎ早に示されたのは大変嬉しかった。演出家に対する質問や、作品の意図をめぐる確認（「あのシーンの○○は何だったのか」など）だけでなく、シーンの解釈をめぐって、あれはこういう意味だったのではないか、いやそうではなく私はこのように見た、というような意見が交わされた。このやりとりをファシリテーションしていて私は、学生によっても鑑賞体験が多様であるということを共有することができたように思った。

このように年間のプログラムを振り返って改めて感じるのは、作品鑑賞をする体験というのは、作品そのものだけでなく、受け取り手の印象によって大きく変わることである。劇場で上演される演劇は舞台上で行われることと客席で行われることが両方存在することで成立するが、今回の取り組みは鑑賞の体験が多様であることを共有し受け止め合う場として機能したのではないかと思われる。また教育者としては、普段私の授業ではどちらかといえばおとなしい学生が、公演後の対話の時間で饒舌に意見を言ったり、とにかく何か話したくてたまらないという様子を見せていたのは驚きだったし、そうした顔を見ることができたのもこのプログラムがあってこそだった。
ただ、もちろん反省もある。特に『妖精の問題 デラックス』後には何人かの学生たちと個人的に激しい意見交換や討論を行うことになった。また、『Pamilya（パミリヤ）』の公演後の対話の時間も、何かもやもやとした思いを抱きながら帰っていった学生もいたようだった。今回の連携では、久留米シティプラザでの「新しい演劇鑑賞教室」のプログラムを体験するにとどまり、たとえば普段の学生たちのホームである大学に戻って、今回の体験を振り返るというような時間を十分に持つことができなかった。今後こうした機会がある際には、より学生たちの体験に寄り添うような教育プログラムを模索していきたいし、そのような試行の機会をいただけた久留米シティプラザには大変感謝している。

関係者プロフィール（所属は2023年3月31日現在）

1 イントロダクション、演劇ワークショップ　進行

多田 淳之介（演出家・東京デスロック主宰）

古典や現代戯曲、ネット上のテキストなど様々な題材を演劇作品として上演する。国際・教育・地域を活動の柱とし海外公演や国際共同制作、学校でのコミュニケーション授業、公共劇場の芸術監督や自治体のアートディレクターとしてアートを活用したまちづくり、人材育成、こどもや親子向けのプログラムなど数多く手掛ける。

2「劇場で考える ～ジェンダー・多様性～」　ゲスト

石井 勇（MINOU BOOKS 店主）

福岡県うきは市生まれ。福岡市天神「cafe&books bibliotheque」にて書籍、雑貨のバイヤーを勤める傍ら音楽やデザインイベントなどの活動を経て、うきは市吉井町にて書店とカフェのお店「MINOU BOOKS」をオープン。

正路 佐知子（福岡市美術館 学芸員）

2007年10月より現職。近年の企画に、「インカ・ショニバレ CBE：Flower Power」(2019)、「梅田哲也うたの起源」(2019-2020)、「コレクションと展示のジェンダーバランスを問い直す」(2021-22)、「田部光子展『希望を捨てるわけにはいかない』」(2022) がある。

3 市原佐都子 /Q『妖精の問題 デラックス』鑑賞、市原佐都子との対話　ゲスト

市原 佐都子（劇作家・演出家・小説家・城崎国際アートセンター芸術監督）

1988年大阪府生まれ福岡県育ち。2011年より Q 始動。人間の行動や身体にまつわる生理、その違和感を独自の言語センスと身体感覚で捉えた劇作、演出を行う。2011年、戯曲『虫』にて第11回 AAF 戯曲賞受賞。2020年『バッコスの信女—ホルスタインの雌』にて第64回岸田國士戯曲賞受賞。2021年、ノイマルクト劇場と共同制作した『Madama Butterfly』をスイス・ドイツで上演。

木村 覚（美学者・日本女子大学教授）

1971 年生まれ。専攻は美学、ダンス研究。20年以上、日本のコンテンポラリーダンス・舞踏を中心としたパフォーマンス批評を行っている。2014年より「ダンスを作るためのプラットフォーム」BONUS を始動。主な著書に『未来のダンスを開発する——フィジカル・アート・セオリー入門』（メディア総合研究所）、『大野一雄・舞踏と生命——大野一雄国際シンポジウム 2007』（共著、思潮社）、『スポーツ／アート』（共著、森話社）、『笑いの哲学』（講談社）などがある。

額田 大志（ヌトミック／東京塩麹）

大学在学中の2012年に、8人組バンド・東京塩麹を結成。音の反復と解体、再構築を主軸とし、バンドでありながら完全に譜面に落とし込まれた独自の音楽性で注目を集める。また2016年に演劇カンパニー・ヌトミックを結成。「上演とは何か」という問いをベースに、音楽のバックグラウンドを用いた脚本と演出で、パフォーミングアーツの枠組みを拡張していく作品が注目を集める。

4 「劇場で考える ～多文化共生～」　ゲスト

田中 優子（外国人介護士育成・就労支援）

看護師・介護支援専門員・教員として約35年間、医療・福祉・教育の仕事に携わる。2009年より外国人介護士育成を中心に活動。現在は、介護福祉士養成校の講師、介護施設の EPA 介護福祉士候補生の国家試験対策を担当。

田中 俊明（リアルテクノロジー株式会社 代表取締役）

国立久留米工業高等専門学校卒業。三菱重工業等での勤務後、製造装置部品等の販売会社を設立。現在は、中国企業へのコンサルティングに従事。近年は外国人労働者に関心を持ち、フィリピンにおける介護士育成学校の整備等にも携わる。これまで訪れた国は20カ国、渡航回数は200回を超える。

5 村川拓也『Pamilya（パミリヤ）』鑑賞、村川拓也との対話　ゲスト

村川 拓也（演出家・映像作家）

ドキュメンタリーやフィールドワークの手法を用いた作品を、映像・演劇・美術など様々な分野で発表し、国内外の芸術祭、劇場より招聘を受ける。虚構と現実の境界に生まれる村川の作品は、表現の方法論を問い直すだけでなく、現実世界での生のリアリティとは何かを模索する。近年『事件』（2021）が第21回 AAF 戯曲賞にて特別賞を受賞。

久留米大学文学部「異文化体験実習II」担当教員

神本 秀爾（久留米大学文学部准教授）

専門は文化人類学。主著『レゲエという実践ーラスタファーライの文化人類学』（京都大学学術出版会 ,2017）、「加工を通じて雄弁な身体を獲得する――肌を脱色するジャマイカ黒人の新たな美学」（『黒人研究』85, 2016）など。地域の魅力をテーマにした楽曲・映像制作グループ〈チクゴズ〉を 2016 年にゼミ生を中心として立ち上げ、「みあれうた」（2021 年度「神宿る島」宗像･沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会 委託事業）など 8 曲を制作している。

企画監修・進行

長津 結一郎（九州大学大学院芸術工学研究院准教授）

多様な関係性が生まれる芸術の場に伴走／伴奏する研究者。専門はアーツ・マネジメント、文化政策。障害のある人などの多様な背景を持つ人々の表現活動に着目した研究を行なっているほか、音楽実技やワークショップに関する教育、演劇・ダンス分野のマネジメントやプロデュースにも関わる。2013 年東京藝術大学大学院博士後期課程修了、博士（学術･東京藝術大学）。著書に『舞台の上の障害者：境界から生まれる表現』（単著。九州大学出版会、2018 年）、『アートマネジメントと社会包摂』（共編著。水曜社、2021 年）など。日本文化政策学会理事、文化経済学会<日本>理事、日本アートマネジメント学会運営委員。